丸亀市埋蔵文化財調査報告　第 17 冊

飯野西分広定遺跡

丸亀市立飯野保育所園舎建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

2014. 3

丸亀市教育委員会

序

このたび、平成25年度に行いました本市飯野町所在の「飯野西分広定遺跡」発掘調査の報告書ができる運びとなりました。

本調査では、この地に古墳時代から古代、中世にわたって集落が形成されていたことが判明しており、特に、古代の終わりから中世に続く掘立柱建物跡が4棟検出されています。丸亀市内には中世遺跡の調査事例がほとんど無いことから、今回の成果を得たことは大きな喜びであり、当時の人々の生活の様子や文化などの時代背景を考察する上で貴重な資料になると期待しているところです。

本報告書が、今後における歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する多くの人の理解と関心がより深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査や報告書作成に際し多大なご協力とご支援をいただきましたすべての皆さまに厚くお礼申し上げます。

平成26年3月31日

丸亀市教育委員会

教育長　中野　レイ子

例　言

1. 本報告書は、丸亀市立飯野保育所園舎建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、丸亀市飯野町に所在する飯野西分広定遺跡（いいのにしぶんひろさだいせき）の報告を収録した。

2. 発掘調査は、丸亀市健康福祉部子育て支援課からの依頼を受け、丸亀市教育委員会が調査主体となり実施した。

3. 発掘調査は、平成 25 年度に本調査を丸亀市教育委員会総務課東信男、谷口梢が行った。

4. 本書の執筆・編集は、谷口が行った。

5. 発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するにあたって、下記の関係諸機関ならびに次の方々からご教示およびご協力を得た。記して厚く謝意を表する（敬称略）。
   丸亀市健康福祉部子育て支援課、地元自治会、香川県教育委員会、高松市教育委員会、岡山市教育委員会、（財）元興寺文化財研究所、森下英治、乗松真也、船築紀子、乗岡実、佐藤亜聖

6. 本書に使用した方位は、座標北を指し、遺跡の測量は世界測地系による。なお、基準点測量及びメッシュ杭の設定は㈱スペースが行った。

7. 本文中の断面図に記載してある「土色」は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所　色票監修『新版標準土色帖 2004 年版』による。

8. 調査地の位置を示した挿図については、国土地理院地形図「丸亀」（50,000 分の 1）、丸亀市が作成した都市計画図（10,000 分の 1：平成 18 年承認番号第 25 号）を使用した。

9. 現地調査及び整理作業によって作成された原図・トレース図・写真データ及び出土遺物は、丸亀市教育委員会に収蔵・保管している。

目　次

第１章　調査の経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第１節　調査に至る経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２節　調査および整理作業の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第２章　立地と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第３章　飯野西分広定遺跡本調査・・・・・・・・・・・・・・・・12
第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第２節　調査の内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第１調査区の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第２調査区の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第３調査区の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第４章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34

挿図図版目次

第 1 図　飯野町西分字広定地区周辺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第 2 図　遺跡分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第 3 図　遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第 4 図　第 1 調査区遺構平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第 5 図　第 1 調査区北・西壁断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第 6 図　第 1 調査区南壁断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第 7 図　SD01 平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第 8 図　SD01 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第 9 図　SD02 断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第 10 図　SD03 断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第 11 図　SD04 断面図・出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第 12 図　SD08 断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第 13 図　SK06 断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第 14 図　SK07・09 断面図・SK09 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・16
第 15 図　第 2 調査区遺構平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第 16 図　第 2 調査区北・東壁断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第 17 図　SD01～03・08～10 断面図、鋤溝出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・19
第 18 図　SD23 断面図、出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第 19 図　SD29 断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第 20 図　SD85～87 断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
第 21 図　SK11 断面図、出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
第 22 図　掘立柱建物跡配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
第 23 図　SB01 平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第 24 図　SB01 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第 25 図　SB02 平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
第 26 図　SB03 平・断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
第 27 図　SB03 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
第 28 図　第 3 調査区遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
第 29 図　SD03・05・23・25～27 断面図、鋤溝出土遺物実測図・・・・・・・・・・28
第 30 図　SD01 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
第 31 図　SD04 断面図、出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
第 32 図　SD110 断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
第 33 図　SK34 平・断面図、出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
第 34 図　SK114 断面図、出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
第 35 図　SB04 平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第 36 図　SB04 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33

表目次

第 1 表　整理作業工程表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第 2 表　土器　観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
第 3 表　石器　観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36

写真図版目次

図版 1		調査前風景：北より
		第 1 調査区全景：南より
図版 2		第 2 調査区全景：北より
		第 3 調査区全景：西より
図版 3	第 1 調査区	重機掘削風景：南より
		人力作業風景：西より
		SD01～03 検出状況：南より
		SD01 遺物出土状況：南より
		SD01～03 完掘状況：北より
		SD04P-P‘断面：南より
		SD04Q-Q‘断面：南より
		SD04 完掘状況：北より
図版 4	第 2 調査区	鋤溝検出状況：西より
		鋤溝完掘状況：南東より
		SD23L-L‘断面：南より
		SD85～87 完掘状況：南より
		SE120 検出状況：南より
		SE120 完掘状況：南より
		柱穴半裁状況：東より
		柱穴群完掘状況：東より
図版 5	第 3 調査区	SD01 完掘状況：東より
		SD04H-H‘断面：西より
		SD116 完掘状況：北西より
		SK34 半裁状況：南より
		SK34 遺物出土状況：南西より
		柱穴半裁状況：東より
		柱穴半裁状況：東より
		柱穴半裁状況：南より
図版 6	第 3 調査区	SK34 周辺完掘状況：東より
		SB04 完掘状況：北西より
		掘立柱建物跡群：南東より
図版 7	出土遺物	1～17
図版 8	出土遺物	18～35

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯と経過

本調査は、丸亀市健康福祉部子育て支援課より飯野町西分字広定甲 12 番、13 番 1、18 番における埋蔵文化財包蔵地の照会があり、香川県教育委員会が設定した、遺跡地図によれば、当該地の南側に存在する上高池付近に弥生時代の包含地が確認されているが、周辺の埋蔵文化財調査は未発掘で包蔵状況が不明確であった。そのため、内容を確認するために試掘調査を実施し、保護措置の有無を検討することとなった。

第１図　飯野町西分字広定地区周辺（S ＝ 1／10,000）

平成24年7月11日～7月17日に試掘調査を実施した。その結果、開発範囲内において古代から中世にかけての土坑数基、古代以降の条里地割に関係する溝状遺構などの遺構および遺物を確認したため、保護措置が必要であると考えられた。

平成25年度において園舎建設工事が開始されることとなり、園舎の設計が成され、本市教育委員会と健康福祉部子育て支援課で協議が行われた。飯野町西分字広定甲12番、13番1、18番を対象とする当該地全域に、園舎建設による掘削作業によって、埋蔵文化財に影響が及ぼすこととなり、発掘調査を行うこととなった。

第２節　調査および整理作業の経過

丸亀市教育委員会は、平成25年6月24日から発掘調査を開始し、平成25年10月1日まで継続して調査を実施した。調査区は、残土置き場確保のため調査区を第1～3調査区と呼称し、西端から実施した。

発掘調査体制は、以下のとおりである。

平成25年度

丸亀市教育委員会

教育長	中野　レイ子
教育部長	宮武　正治
総務課	
課　長	山地　幸夫
副課長（丸亀市立資料館長）	関野　真樹
文化財保護担当長	東　　信男
主　査	近藤　武司
主　査	野沢　明子
非常勤	谷口　梢
非常勤	徳永　多佳子
非常勤	鎌谷　周子

発掘調査に携わった方は、以下のとおりである。

発掘作業員　茶本　憲一　正岡　良一　弘松　章志　塩田　輝彦　山下　月男　西山　與三弘　水谷忠　小川　浩司　尾藤　元典　高橋　佐東　三谷　愛子　松原　忠　淀川　清美

作業の経過

主な発掘作業は以下のとおりである。

平成25年

6月24日（月）　作業小屋設置準備。調査範囲に安全杭を設置。
6月25日（火）　作業小屋設置準備。安全杭に立ち入り禁止のロープ設置。
6月28日（金）　作業小屋、仮設トイレ設置完了。道具搬入。
7月1日　（月）　第1調査区重機掘削作業。
7月2日　（火）　重機掘削作業。調査区南壁断面図作成。調査南側の遺構検出写真撮影。
7月3日　（水）　重機掘削作業。
7月4日　（木）　水抜き。
7月8日　（月）　水抜き。遺構面精査。
7月9日　（火）　遺構面精査。遺構検出写真撮影。遺構配置図（S=1/100）作成。
7月10日（水）　遺構面精査。

7 月 11 日（木）　遺構面精査。
7 月 12 日（金）　遺構掘削開始。遺構断面図作成。
7 月 16 日（火）　遺構掘削。
7 月 17 日（水）　SD04 検出写真撮影。
7 月 18 日（木）　SD04 掘削。
7 月 19 日（金）　SD04 掘削。
7 月 22 日（月）　SD04 掘削。第 1 調査区全面掃除。
7 月 23 日（火）　第 1 調査区全面掃除。遺構平面図（S=1/20）作成。
7 月 24 日（水）　第 1 調査区全景写真撮影終了。遺構平面図作成。
7 月 25 日（木）　調査区レベル測量。
7 月 26 日（金）　第 1 調査区埋め戻し作業。
7 月 29 日（月）　第 2 調査区重機掘削作業。遺構面精査。
7 月 31 日（水）　水抜き。重機掘削作業。遺構面精査。
8 月 1 日　（木）　重機掘削作業。遺構面精査。
8 月 2 日　（金）　水抜き。
8 月 5 日　（月）　水抜き。
8 月 6 日　（火）　水抜き。遺構面精査。
8 月 7 日　（水）　遺構面精査。遺構配置図（S=1/100）作成。
8 月 8 日　（木）　遺構面精査。遺構配置図（S=1/100）作成。
8 月 9 日　（金）　遺構検出写真撮影。遺構配置図（S=1/100）完了。
調査区東壁断面図作成。
8 月 19 日（月）　水抜き。遺構掘削作業。
8 月 20 日（火）　遺構掘削作業。調査区北壁断面図作成。遺構半裁写真撮影。
遺構半裁断面図作成。
8 月 21 日（水）　遺構掘削作業。遺構半裁写真撮影。遺構半裁断面図作成。
8 月 23 日（金）　遺構掘削作業。遺構平面図（S=1/20）作成。調査区東側掃除。
8 月 28 日（水）　水抜き。遺構掘削作業。遺構平面図（S=1/20）作成。
8 月 29 日（木）　遺構掘削作業。遺構平面図（S=1/20）作成。
8 月 30 日（金）　第 2 調査区東側遺構完掘写真撮影。
9 月 3 日　（火）　水抜き。
9 月 5 日　（木）　水抜き。調査区西側遺構面精査。
9 月 6 日　（金）　水抜き。
9 月 9 日　（月）　水抜き。
9 月 10 日（火）　調査区西側遺構面精査。
9 月 11 日（水）　調査区西側遺構面検出写真撮影。
9 月 12 日（木）　遺構掘削作業。
9 月 13 日（金）　遺構掘削作業。
9 月 14 日（土）　第 2 調査区全景写真撮影。遺構平面図（S=1/20）作成。
9 月 16 日（月）　第 2 調査区レベル測量。
9 月 17 日（火）　第 2 調査区レベル測量。
9 月 18 日（水）　第 2 調査区埋め戻し作業。
9 月 19 日（木）　第 3 調査区重機掘削作業。遺構面精査。遺構配置図（S=1/100）作成。
9 月 20 日（金）　遺構面精査。遺構配置図（S=1/100）作成。
9 月 21 日（土）　遺構掘削作業。遺構配置図（S=1/100）作成。
9 月 22 日（日）　遺構掘削作業。遺構断面図作成。

9月23日（月）　第3調査区東側重機掘削作業。
9月24日（火）　重機掘削作業。遺構面精査。遺構掘削作業。
9月25日（水）　遺構面精査。遺構掘削作業。
9月26日（木）　遺構半裁写真撮影。遺構断面図作成。
9月27日（金）　遺構掘削完了。第3調査区全景写真撮影。
9月30日（月）　遺構平面図（S=1/20）作成。
10月1日（火）　飯野保育園園児見学。遺構平面図（S=1/20）作成。レベル測量。
10月2日（水）　第3調査区1部埋め戻し作業。
10月5日（金）　飯野小学校6年生発掘体験、見学。作業小屋、仮設トイレ撤去。
調査完了。

整理作業体制は、以下のとおりである。
平成25年度
丸亀市教育委員会

教育長	中野　レイ子
教育部長	宮武　正治
総務課	
課　長	山地　幸夫
副課長（丸亀市立資料館長）	関野　真樹
文化財保護担当長	東　　信男
主　査	近藤　武司
主　査	野沢　明子
非常勤	谷口　梢
非常勤	徳永　多佳子
非常勤	鎌谷　周子
非常勤	荻田　利幸

整理作業は、発掘調査終了後直ちに実施し、谷口が担当し、東が補佐した。出土遺物洗浄、遺物注記、接合を実施し、分類作業および選別作業を行った。その後、遺物実測、遺構・遺物図面のトレース、レイアウト、遺物写真撮影、執筆、編集を実施した。

第1表　整理作業工程表

	平成25年			平成26年		
	10月	11月	12月	1月	2月	3月
洗浄						
接合・復元						
実測						
トレース						
写真撮影						
執筆・編集						

第 2 章　遺跡の立地と環境

第 1 節　地理的環境

飯野西分広定遺跡は、丸亀平野東部に聳える飯野山の北西麓に位置している。丸亀平野は、南部の山間部から瀬戸内海に向かって流れ込んでくる大束川、土器川、弘田川、金倉川があり、これらの氾濫・堆積によって形成された沖積平野である。

丸亀平野には、溶岩が噴出して覆われた台地が浸食されたビュート状の孤立した山々が見られる。平野の東側には飯野山、青ノ山などがあり、市街地の中央には亀山があり、頂上には丸亀城がある。さらに平野中央部には、双子山があり、それ以外はほぼ平坦な平野をなしている。

遺跡付近は、飯野山の東側を流れる大束川と西側を流れる土器川によって形成された緩扇状地で、航空写真判読などから旧河道が多く流れていることが容易に観察できる地域である。また、対象地西側においては、条里型地割が明瞭に残っており、本遺跡周辺においても条里の復元が可能な地域であることも想定できる。

第 2 節　歴史的環境

飯野西分広定遺跡周辺では、これまでの発掘調査事例はかなり乏しく、遺跡の性格が明確に判明しているものは、ほとんど見られない。飯野山北側、東側については近年道路整備事業により大規模開発が集中し、多くの発掘調査事例が豊富に見られる。

飯野町域は、国道 11 号線を挟んで南北に広く、北端では青ノ山南西裾部より南の丘陵上に築造された前方後円墳である吉岡神社古墳が見られる。それから、本遺跡までの約 1.5 ㎞の間、明確な遺跡は存在していない。

飯野山周辺を中心に遺跡の分布を見ていくと、旧石器時代や縄文時代は、ナイフ形石器や石匙が採集されているが、明確な遺構などは検出されていない。

弥生時代では、『飯野山西麓散布地』が存在している。飯野山の西麓造成工事に伴い平成 13 年度～15 年度まで丸亀市教育委員会が発掘調査を行い、弥生時代後期の竪穴建物跡を 23 基検出している。飯野山東麓では、国道 438 号線整備工事により香川県埋蔵文化財センターが調査を行い『東坂元秋常遺跡』、『東坂元北岡遺跡』などが存在し、飯野山山頂でも中期の弥生土器が採集されていることから、高地性集落の可能性が考えられている。後期から終末期にかけて集落は、『下川津遺跡』『川津一ノ又遺跡』などのように増加・拡大の傾向を示している。

古墳は、小規模な前方後円墳である『三ノ池古墳（全長約 35m）』が飯野山東麓に所在している。他にも、平成 4 年度では飯山町教育委員会が『城山 4 号墳』の発掘調査を行い、竪穴石室などの埋葬施設を明らかにしている。『次郎山古墳』、『山田山古墳』なども前期に属するものと考えられている。中期では、円筒埴輪や古式須恵器を出土している『城山 1～3 号墳』、『国持塚古墳』などが所在している。後期に入ると横穴式石室が現れ、古墳の築造も増加していく傾向にある。飯野山西麓散布地では、弥生時代後期の竪穴建物跡の上に横穴式石室を伴う円墳が 3 基築かれている。石室内からは、須恵器、馬具などの鉄製品、管玉、ガラス玉、耳環、指輪などの装飾品などが出土している。

古墳時代の集落遺跡は、ほとんど知られていなかったが、平成 25 年度の国道 438

号線整備工事に伴い、香川県埋蔵文化財センターが発掘調査を行ったところ、竈を併設している数基の古墳時代後期の竪穴建物跡が検出された『岸ノ上遺跡』があり、古墳時代の集落形態に大きな兆しが見られる発見があった。

古代では、その『岸ノ上遺跡』において、古代の主要幹線道路である南海道の側溝と考えられる溝跡 2 状を検出している。『岸ノ上遺跡』の南約 1 ㎞のところに『法勲寺』が建立されている。古代における本遺跡の周辺地域は、律令制下で旧鵜足郡にあたり、古代条里地割が比較的顕著に残っている地域である。

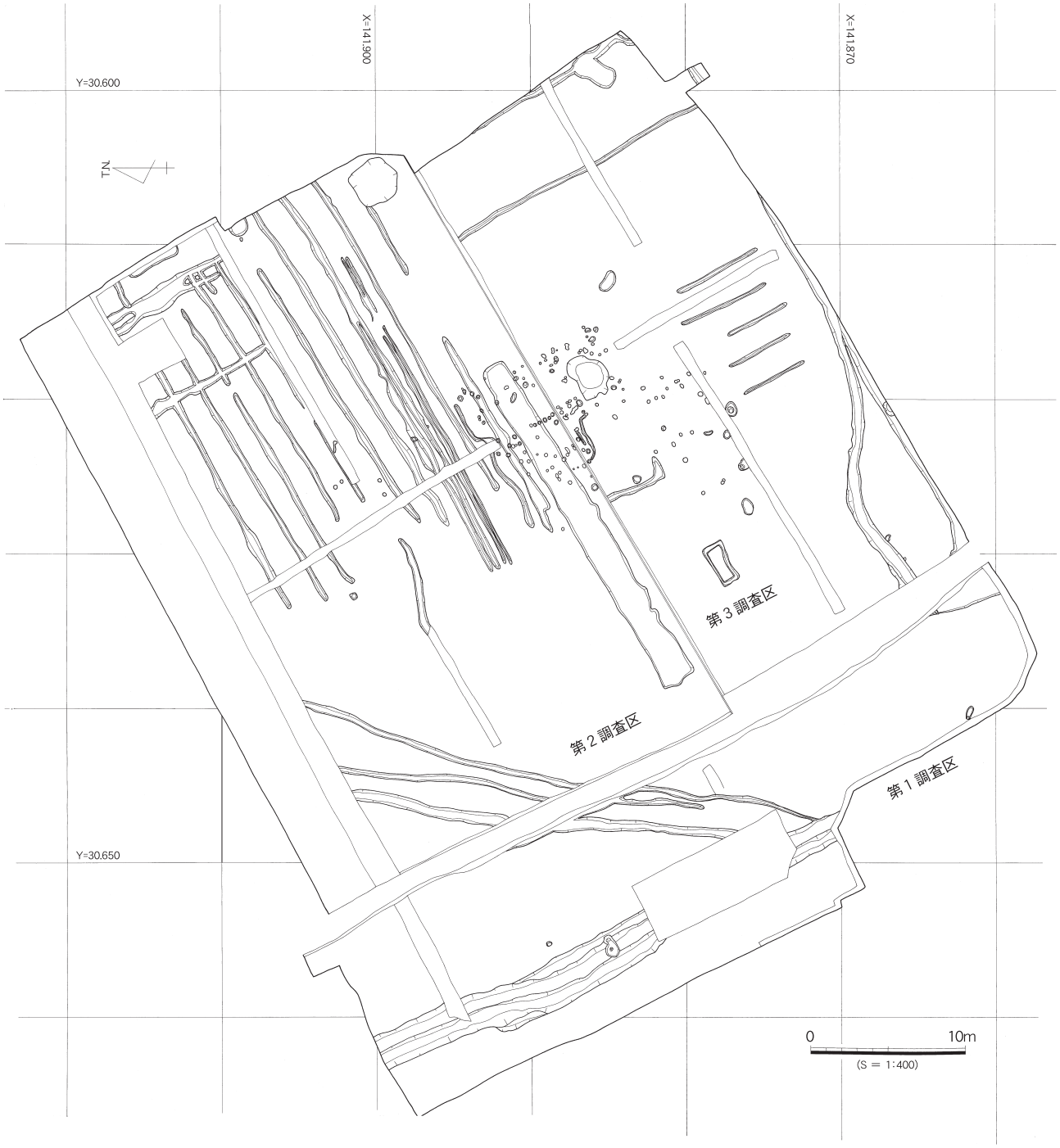
中世においては、条里地割に沿った土地改良が大規模に行われていることが、近年の民間開発工事に伴う調査などから確認できるが、明確な遺跡の存在はほとんど見られない。しかし、飯野山南麓に所在する『飯山北土居遺跡』は、平成 23 年度確認調査により、約 1 町を囲む外濠の溝を検出しており、この地域の有力者が居館を構えていたものと考えられる。

法勲寺は、中世にも存続していたことが、出土遺物や文献史料からも確認されている。文献史料からは、『法勲寺城跡』が次郎山山頂にあったとの伝承が残っている。

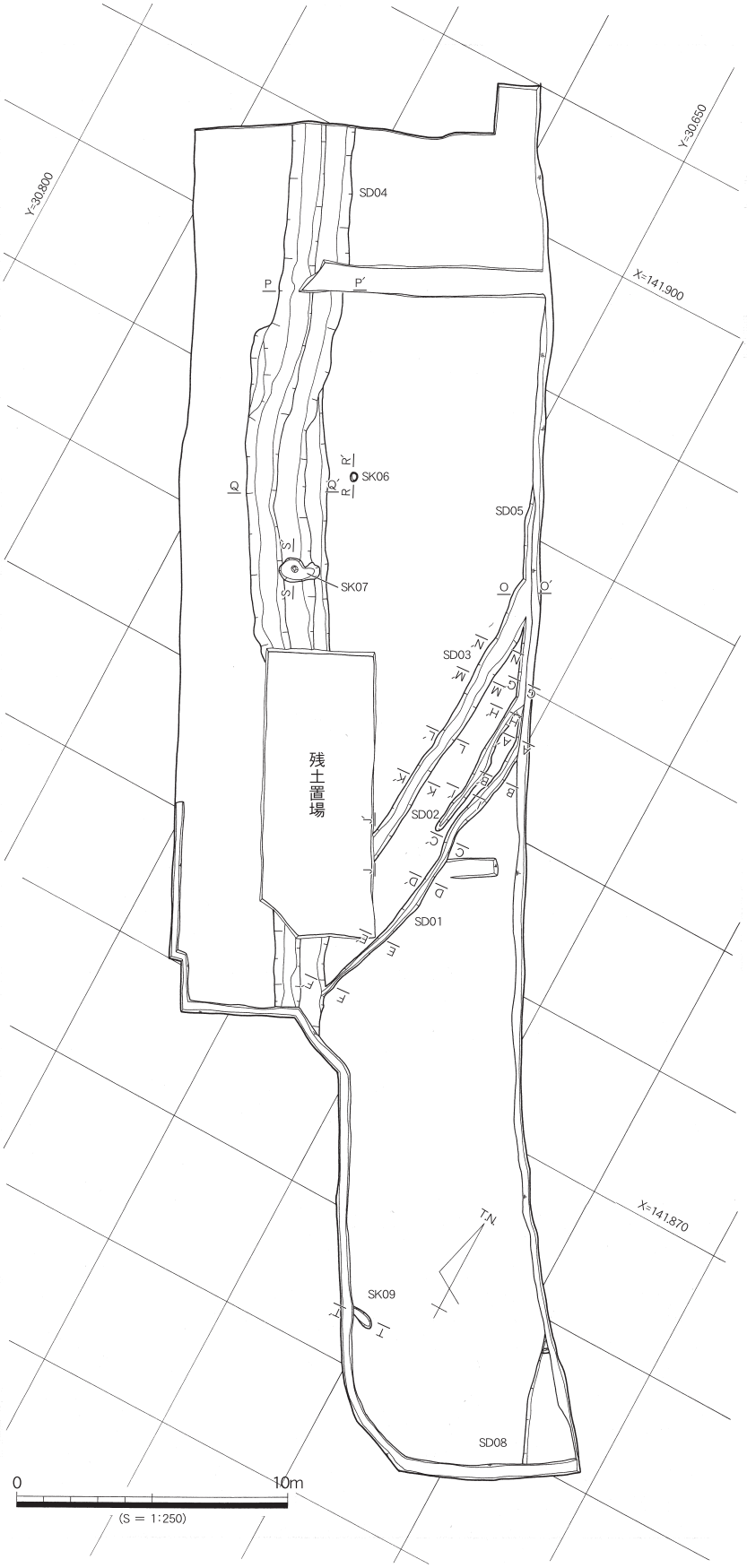
これらのことから、古代以降の集落の様相は、明確ではない地域であり、本遺跡が初現と言っても過言ではない状況である。

1. 飯野西分広定遺跡
2. 丸亀城跡
3. 第1次丸亀城大手町地区
4. 第2次丸亀城大手町地区
5. 第3次丸亀城大手町地区
6. 第4次丸亀城大手町地区
7. 中津城
8. 新田橋本遺跡
9. 今津中原遺跡
10. 津森位遺跡
11. 田村廃寺跡
12. 中の池遺跡
13. 平池西遺跡
14. 平池南遺跡
15. 平池東遺跡
16. 辺池遺跡
17. 田村池の下遺跡
18. 田村巴田遺跡
19. 田村池遺跡
20. 柞原上所遺跡
21. 鍛冶屋北遺跡
22. 青ノ山古墳群
23. 吉岡神社古墳
24. 下川津遺跡
25. 川津下樋遺跡
26. 三条番ノ原遺跡
27. 三条黒島遺跡
28. 郡家原遺跡
29. 郡家一里屋遺跡
30. 郡家大林上遺跡
31. 郡家田代遺跡
32. 川西北原遺跡
33. 川西北・七条Ⅰ遺跡
34. 川西北・七条Ⅱ遺跡
35. 川西北鍛冶屋遺跡
36. 三条中村遺跡
37. 郡家八幡上遺跡
38. 郡家地頭遺跡
39. 領家遺跡
40. 道池北遺跡
41. 郡家下所遺跡
42. 宝幢寺跡
43. 垂水横井遺跡
44. 垂水妙見遺跡
45. 垂水馬場遺跡
46. 飯野東二瓦礫遺跡
47. 飯野東分山崎南古墳
48. 飯野山西麓散布地
49. 飯野山山頂遺跡
50. 三ノ池前方後円墳
51. 西又遺跡
52. 川津一ノ又遺跡
53. 川津東山田遺跡
54. 川津川西遺跡
55. 西坂元内板遺跡
56. 東坂元三ノ池遺跡
57. 東坂元北岡遺跡
58. 東坂元秋常遺跡
59. 久保大塚遺跡
60. 極楽寺古墳
61. 城山古墳群
62. 若宮遺跡
63. 法勲寺城跡
64. 法勲寺跡
65. 岡田万塚
66. 車塚
67. 大窪池遺跡
68. 陣の丸古墳群
69. 次見遺跡
70. 宮ノ前遺跡
71. 庄遺跡
72. 蔵ノ内遺跡
73. 行末西遺跡
74. 行末遺跡
75. 快天山古墳
76. 佐古川・窪田遺跡
77. 石塚山古墳群
78. 佐古川遺跡
79. 宇閇神社古墳
80. 平尾墳墓群
81. 室塚遺跡
82. 羽間遺跡
83. 西長尾城跡
84. 栗熊城跡
85. 岸ノ上遺跡
86. 飯山北土居遺跡
87. 次郎山古墳群

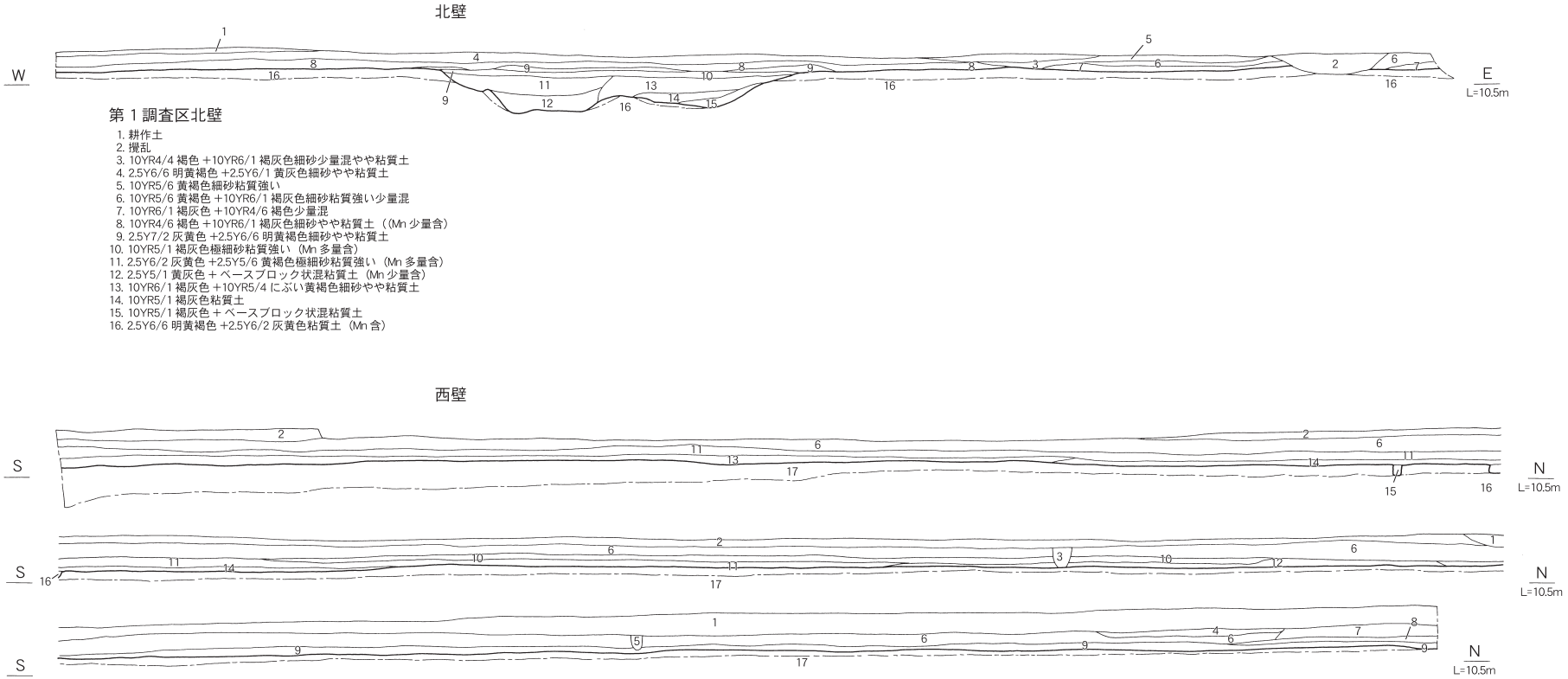
第２図　遺跡分布図（S ＝ 1／75,000）


X=141.900
X=141.870
Y=30.600
Y=30.650
N
第3調査区
第2調査区
第1調査区
0
10m
(S = 1:400)

第3図　遺構配置図



第４図　第１調査区遺構平面図



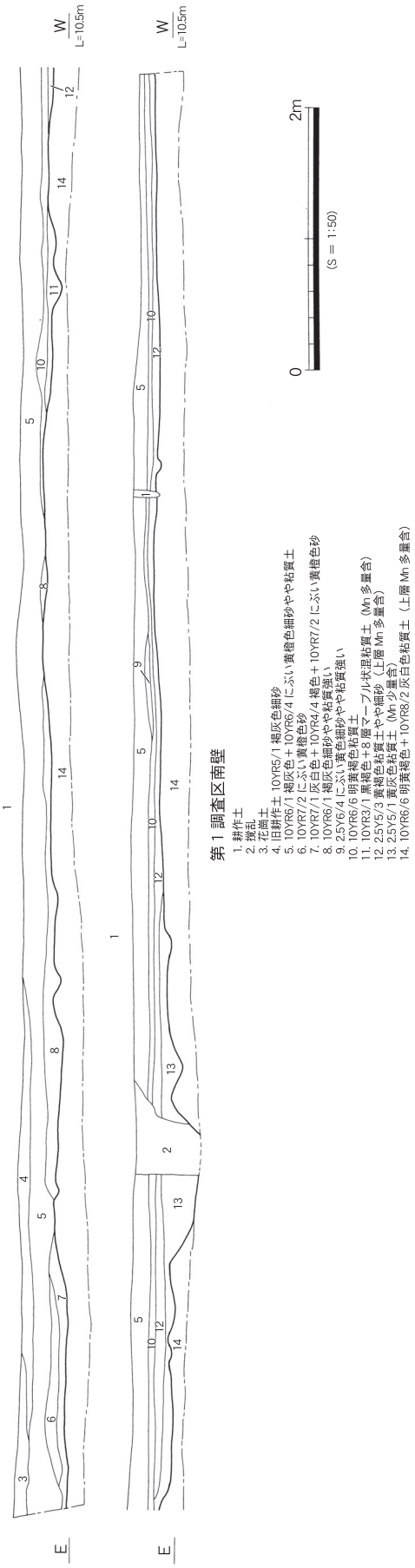
第１調査区北壁

1. 耕作土
2. 攪乱
3. 10YR4/4 褐色 +10YR6/1 褐灰色細砂少量混やや粘質土
4. 2.5Y6/6 明黄褐色 +2.5Y6/1 黄灰色細砂やや粘質土
5. 10YR5/6 黄褐色細砂粘質強い
6. 10YR5/6 黄褐色 +10YR6/1 褐灰色細砂粘質強い少量混
7. 10YR6/1 褐灰色 +10YR4/6 褐色少量混
8. 10YR4/6 褐色 +10YR6/1 褐灰色細砂やや粘質土（(Mn 少量含）
9. 2.5Y7/2 灰黄色 +2.5Y6/6 明黄褐色細砂やや粘質土
10. 10YR5/1 褐灰色極細砂粘質強い（Mn 多量含）
11. 2.5Y6/2 灰黄色 +2.5Y5/6 黄褐色極細砂粘質強い（Mn 多量含）
12. 2.5Y5/1 黄灰色 + ベースブロック状混粘質土（Mn 少量含）
13. 10YR6/1 褐灰色 +10YR5/4 にぶい黄褐色細砂やや粘質土
14. 10YR5/1 褐灰色粘質土
15. 10YR5/1 褐灰色 + ベースブロック状混粘質土
16. 2.5Y6/6 明黄褐色 +2.5Y6/2 灰黄色粘質土（Mn 含）

第１調査区西壁

1. 耕作土
2. 旧耕作土
3. 攪乱
4. 7.5YR5/6 明褐色 +10YR6/1 褐灰色細砂
5. 耕作土 +6 層まばら混
6. 10YR6/1 褐灰色 +10YR6/4 にぶい黄橙色細砂
7. 10YR6/1 褐灰色 +10YR5/6 黄褐色少量混細砂やや粘質土
8. 10YR4/4 褐色 +10YR6/1 褐灰色混細砂粘質強い（Mn 多量含）
9. 2.5Y6/1 黄灰色 +2.5Y6/6 明黄褐色少量混細砂やや粘質土
10. 10YR5/6 黄褐色 +10YR6/1 褐灰色少量混細砂粘質強い
11. 10YR6/6 明黄褐色 +10YR6/1 褐灰色細砂粘質強い
12. 10YR4/6 褐色 +10YR5/1 褐灰色混（Mn 多量含）粘質土
13. 10YR6/1 褐灰色 +10YR6/6 明黄褐色（Mn 多量含）細砂粘質強い
14. 10YR5/1 褐灰色細砂粘質強い（Mn 多量含）
15. 2.5Y6/2 灰黄色～ 5/2 暗灰黄色細砂粘質強い（Mn 少量含）
16. 10YR5/1 褐灰色～ 4/1 褐灰色細砂粘質強い（Mn 多量含）
17. 2.5Y6/6 明黄褐色 +2.5Y6/2 灰黄色粘質土（(Mn 含）

第５図　第１調査区北・西壁　断面図



第６図　第１調査区南壁　断面図

第３章　飯野西分広定遺跡本調査

第１節　調査に至る経緯

平成 24 年度に行った試掘調査の結果から、飯野保育所新築工事に伴い本発掘調査が行われることが決定した。保育所新築工事開始が平成 25 年 11 月より予定されており、平成 24 年度に発掘調査に掛かる予算を申請し、平成 25 年 6 月 17 日に埋蔵文化財発掘調査に関する説明会を行い、調査を開始できる体制を整えることができたので、梅雨があけるのを待って 6 月 24 日から 10 月 5 日まで調査を行った。

第２節　発掘調査の内容

第１調査区の概要

発掘調査対象地を 3 分割したうち、最も西側に位置する南北に長い調査区である。平面形はほぼ長方形を呈して短辺約 13m、長辺約 50m を測る。地形により北側 20m 部分は短辺がさらに短くなり、約 9m で面積約 673 ㎡を測る。

基本的土層堆積状況は、耕作土、床土、包含層、黄褐色粘質土（地山）であることが判明した。調査区東端では現在の水路により撹乱が見られるところもあるが、安定した地山である。地域住民からの聞き取り調査では、約 30 年前まで宇多津町にある鍋谷に大規模な瓦工場があり、この付近の粘土を持って行ったという情報があった。包含層と考えられる褐灰色細砂は、厚さが 10cm もなく、土器もほとんど含まれていなかった。これらのことから遺構面は削られていたものと考えられる。

検出した主な遺構には、溝状遺構 SD01～05、08 と SK06、07、09 がある。

SD01

第１調査区東側中央において、3 条の溝状遺構を検出した。その内の一番北側に位置する溝状遺構を SD01 とした。幅約 30～50cm、深さ 15cm 前後を測り、長さ約 12.5m 分を検出した。調査区中央を東側からほぼ南北方向に流れており、南端では SD04 に切られており、南側の詳細は不明である。北側に沿っていくと第２調査区において延長を検出した。本調査地全体では約 55m 分を検出したことになる。

5 箇所のセクションを設定し、土層断面と埋土を観察、深さを確認した。土層堆積状況は、単層で灰黄色粘質土を呈している。

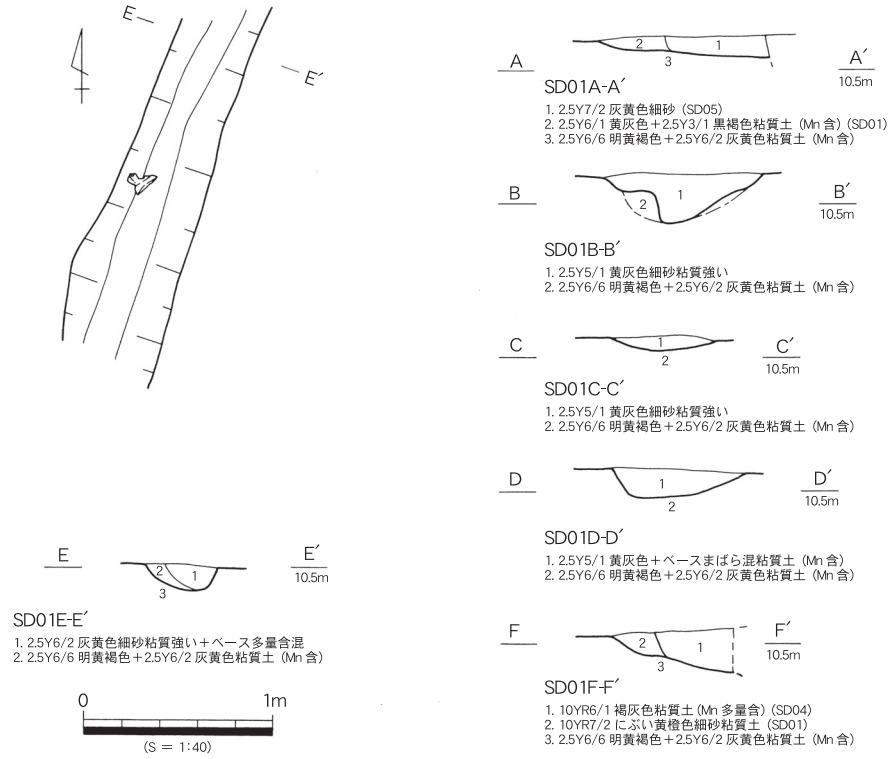
遺物は、少ないながらも時代を判別できる土師器鉢（1）とサヌカイト製の石匙（2）が出土した。

土師器

鉢（1）は、口径（15.8cm）、器高 7.3cm、残存率口縁部 3/8 である。胎土はやや粗く、直径 1mm 以下の長石、石英を多く含んでいる。摩滅が激しく、調整などは不明だが、弥生時代終末期から古墳時代初期のものと考えられる。

石器

石匙（2）は、横長剥片素材で、刃部は片面調整が施されている。完形で、最大長 5.0cm、最大幅 6.3cm、最大厚 0.9cm、重量 18.0g。石材はサヌカイトである。

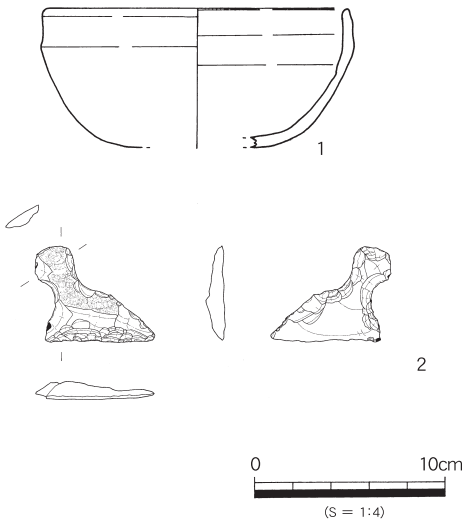


第 7 図　SD01　平・断面図

SD02

第 1 調査区東端で検出した。SD01 の北側に位置し、幅 20～40cm、深さ 5cm 前後を測り、長さ約 7.7m 分を検出した。SD01 に並行して調査区東側からほぼ南北に流れており、南端は調査区中央で終焉を迎えた。北側は、第 2 調査区において延長を検出でき、本調査地全体では約 40m 分を検出したことになる。

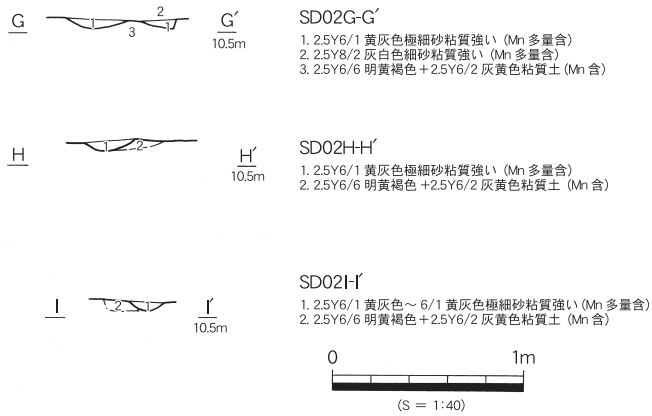
3 箇所のセクションを設定し、土層断面と埋土を観察、深さを確認した。土層堆積状況は、単層で灰黄色細砂（粘質強い）を呈している。出土遺物はない。



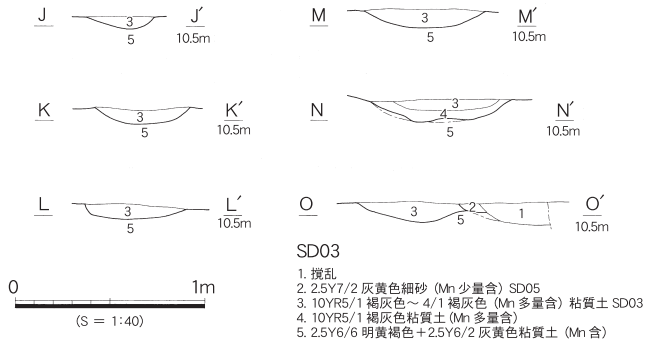
第 8 図　SD01　出土遺物実測図

SD03

第 1 調査区東端で検出した。SD02 の北側に位置し、幅 40～80cm、深さ 15cm 前後を測り、長さ約 10.8m 分を検出した。SD01、02 に並行して調査区東側からほぼ南北に流れており、南端は調査区中央にある掘削不可能な範囲に辺り、検出を止めた。この掘削不可能範囲は、長軸約 10.5m、短軸約 4.0m を測る。遺構掘削などで出た残土置き場とした。



第 9 図　SD02　断面図



第10図　SD03　断面図

SD03 の北側は、第 2 調査区において延長を検出でき、本調査地全体では約 30m 分を検出したことになる。

6 箇所のセクションを設定し、土層断面と埋土を観察、深さを確認した。土層堆積状況は、単層で灰黄色細砂（粘質強い）を呈している。出土遺物はない。

SD04

第 1 調査区の中央を縦断している溝跡を検出した。現状の地形に沿っており、幅約 1.5m～3.3m、深さ 20～30cm、長さ約 20m 分を検出した。北端から約 7.3m 付近で西肩が約 1.0m 膨らみ緩やかに狭まりながら南側に存在する藤高池に向かって流れている。第 1 調査区北端では、駐車場建設予定地であるため、掘削不可能地が存在している。

第 1 調査区終了時に埋め戻す際、トレンチを設定し SD04 の延長を確認でき、本調査全体では、約 40.3m 分を検出した。

3 箇所のセクションを設定し、土層断面と埋土を観察、深さを確認した。断面観察から、2 条の溝が切り合っていることが確認できた。遺構検出段階では埋土の違いが判別できなかった。東側の溝跡が幅約 1.0m、深さ約 20cm 前後、新しい西側の溝が、幅約 1.5m、深さ約 30cm 前後を確認した。土層堆積状況は、灰黄色粘質土を呈しているが、西側の深い溝の埋土は、褐色が強い。東肩では、黄褐色の地山をブロック状に多く含んでいる層が見られることから人為的に堆積しており、掘り直しが行われていたものと考えられる。

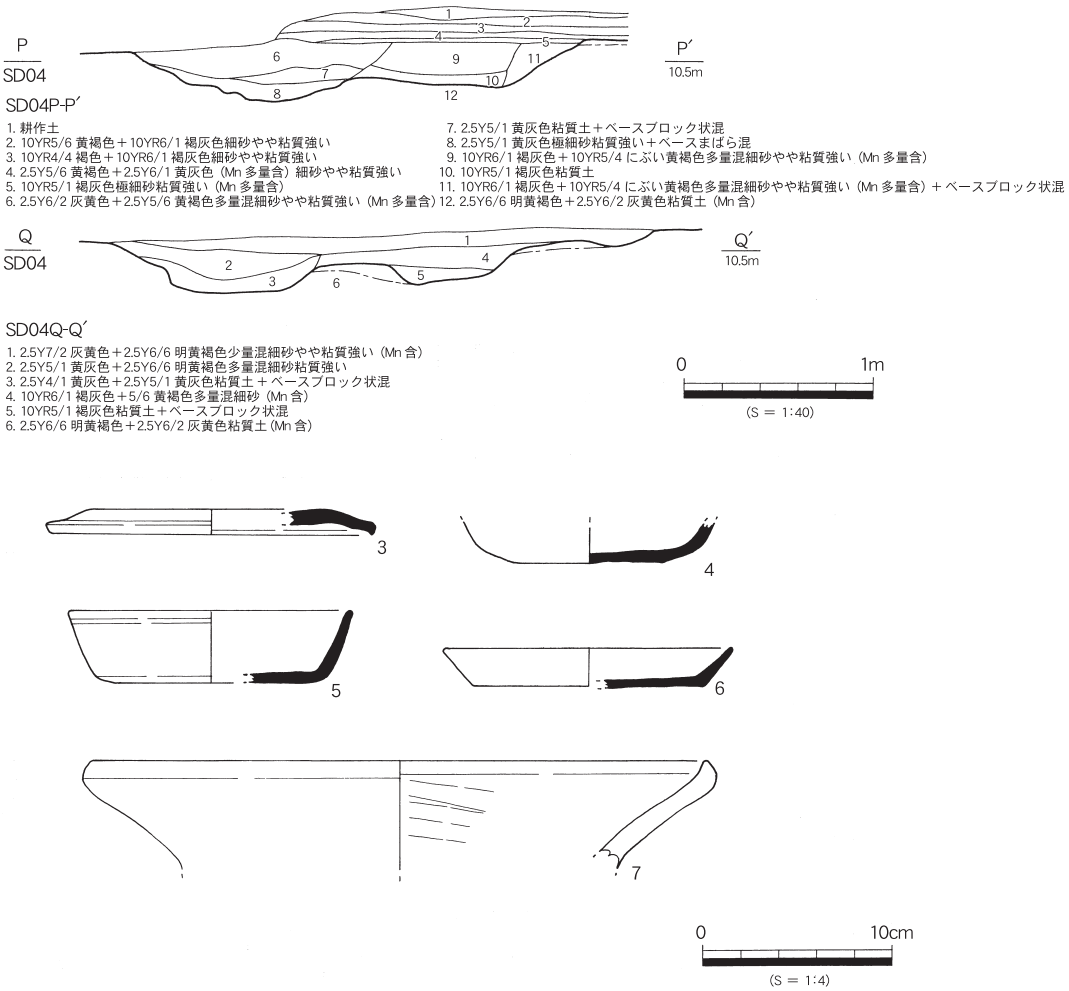
遺物は、須恵器杯蓋 1 点、杯身 2 点、皿 1 点、土師質の土釜 1 点を出土した。

須恵器

須恵器杯蓋（3）は、おそらく摘みを貼付する蓋であると考えられる。天井部は低く平らである。端部は内側に曲げられやや肉厚である。杯身（4）は、高台を持たず、比較的平らである。焼成が軟質でやや磨滅が見られる。杯身（5）は、底部は比較的深く平らである。口縁部は底部から上外方にのび端部は丸く仕上げられている。底部両端に外反する高台を貼付する。焼成は、堅緻である。皿（6）は、焼成が軟質である。底部は浅く平らである。口縁部は短く外反しいて端部に至る。端部は丸くなっている。これらの須恵器は、8 世紀後半から 9 世紀前半のものと考えられる。

土師質土器

土師質の土釜（7）は、胴部に鍔が付くものと考えられる。口縁端部を内方に短く屈曲させ、頸部を外方に「く」の字に屈曲させている。摩滅により調整が見にくいが、内面に刷毛目が見られる。10 世紀前半のものと考えられる。



第11図　SD04　断面図　出土遺物実測図

SD05

第 1 調査区の東端において検出した。第 1 調査区と第 2 調査区の間に幅 1m の水路が流れている。その水路工事によって溝の大半を撹乱で壊されていた。唯一検出できた場所が SD01～03 付近で、現状の水路に沿っており、幅 40cm、深さ 15cm 前後を測り、長さ約 9m 分を検出した。

SD02～03 と切り合い関係にあったため、セクションを 2 箇所設定し土層断面と埋土を観察、深さを確認した。土壌堆積状況は、単層で灰白色細砂を呈している。SD05 が SD01～03 を切っている。出土遺物がなく、詳細な情報は不明である。

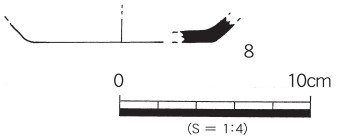
SD08

第 1 調査区南端において検出した。調査区東側から南に向かい、調査区を斜交している。最大幅約 2.0m、深さ約 10cm 前後を測り、長さ約 4.8m 分を検出した。第 2、3 調査区に延長している様子が見られず、埋土が SD05 の灰白色細砂と類似していることから、SD05 が現状の水路に沿いながら、南端で西側にやや屈曲したものと考えられる。

1 箇所のセクションを設定し、土層断面と埋土を観察、深さを確認した。土壌堆積状況は、単層で灰白色細砂を呈している。出土遺物は、須恵器が 1 点出土している。

須恵器

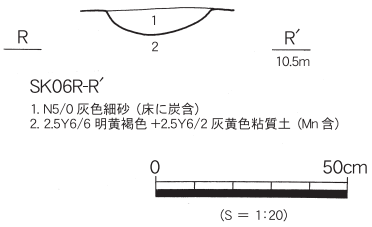
須恵器の皿（8）は、底部は平らで、短く外反するものと考えられる。焼成は堅緻である。8 世紀後半から 9 世紀前半のものと考えられる。



第12図　SD08　出土遺物実測図

SK06

第 1 調査区中央において、やや北寄りで 1 基のみ検出した。直径約 27 ㎝、深さ約 6 ㎝前後を測る。埋土は、灰色細砂で底に炭が筋状に溜まっているのを確認した。これに伴う柱穴は検出できず、建物などの復元は不可能であった。出土遺物がなく、埋没時期などは不明である。



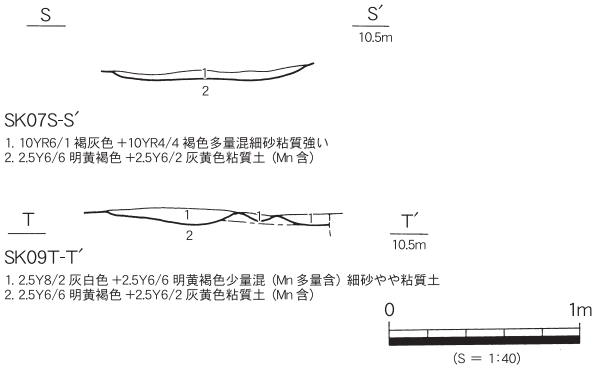
第13図　SK06　断面図

SK07

第 1 調査区中央に縦断する SD04 の底で検出した。長軸約 1.2m、短軸 35cm を測る楕円形をした土坑である。深さは約 5 ㎝前後で、埋土は褐灰色細砂の単層である。SD04 の埋土が灰黄色粘質土であったので落ち込かと考えられたが、埋土の違いから土坑と認識した。出土遺物はない。

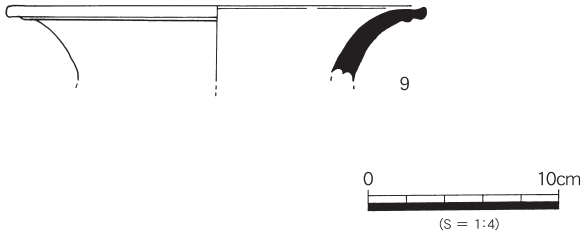
SK09

第 1 調査区南端西側において検出した。遺構検出時において、広範囲に不明確な灰黄色細砂を検出しており、浸み込みと判断し手作業で精査していくと須恵器の甕の口縁部（9）が出土した。長軸約 1.0m、短軸約 40cm を測る不定形な土坑である。

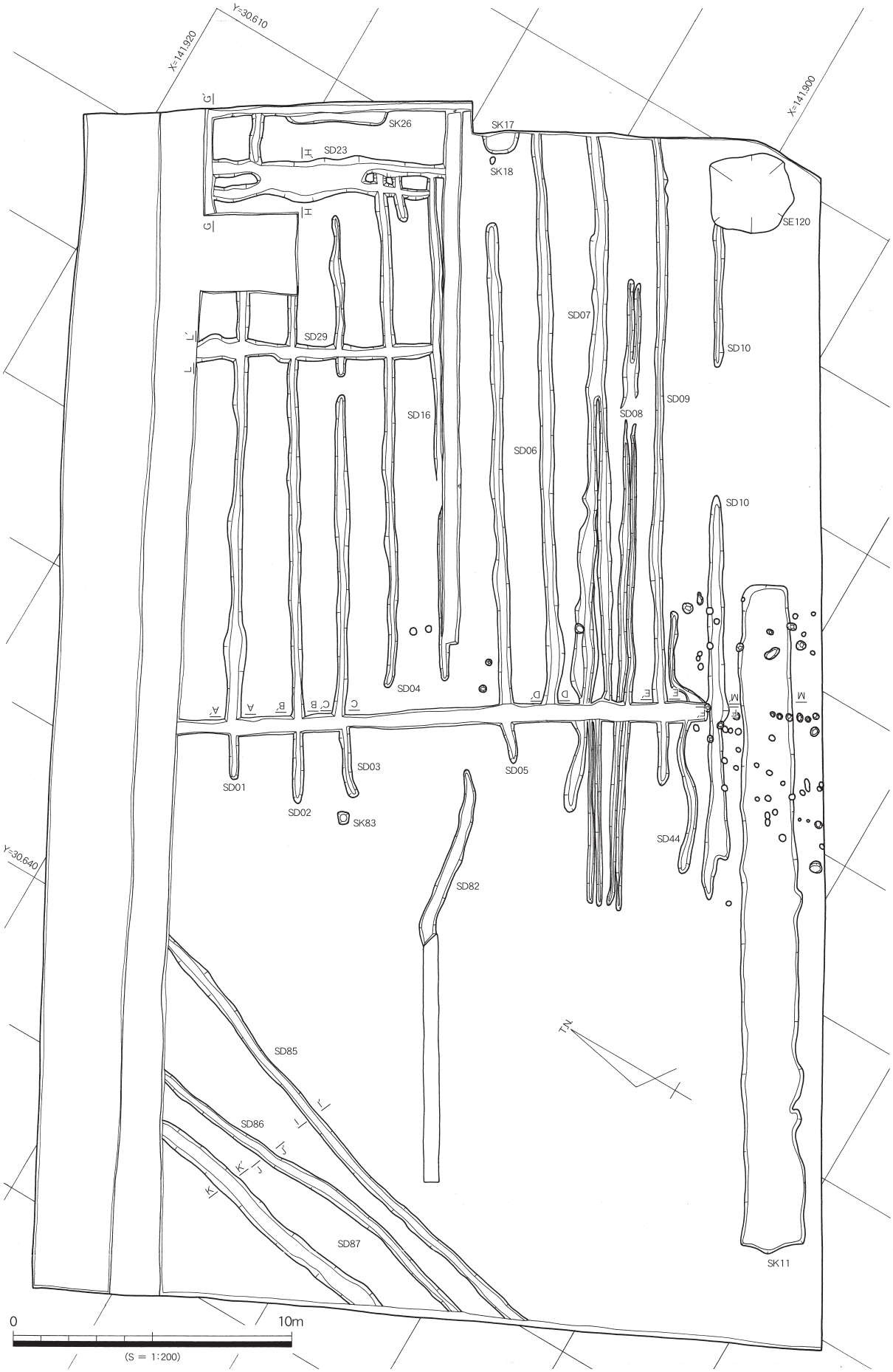


須恵器

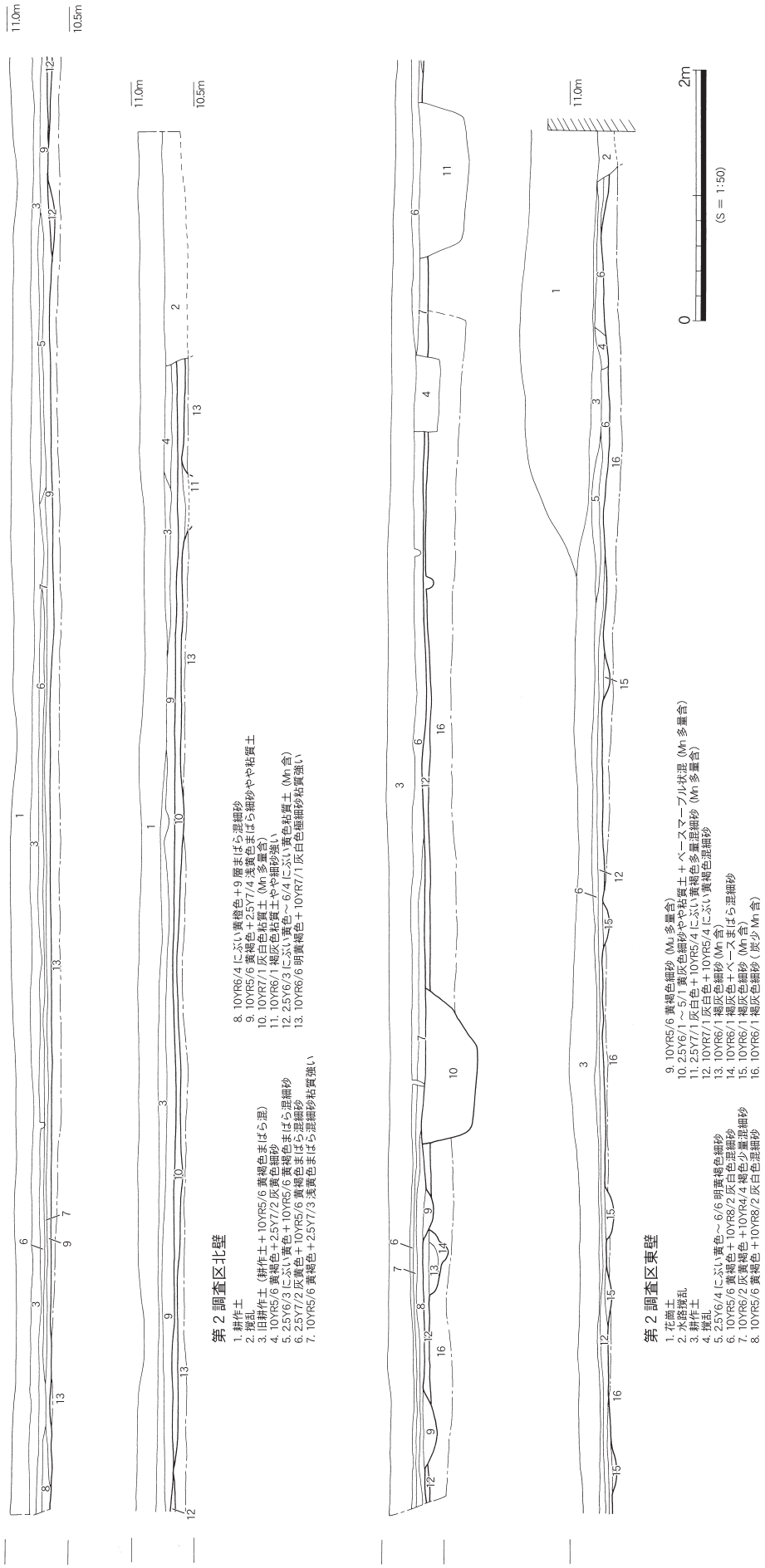
須恵器甕（9）は、口頸部の基部は太く大きく外湾して上方に延び、端部で肥厚し丸味をおびている。外面に凸線が 1 条めぐらされている。焼成は堅緻である。



第14図　SK07・09　断面図　SK09　出土遺物実測図



第15図　第２調査区　遺構平面図



第16図　第２調査区北・東壁　断面図

第 2 調査区の概要

発掘調査対象地を 3 分割したうち、最も北側に位置する調査区である。平面形はほぼ長方形を呈して短辺約 27m、長辺約 42m で、面積約 1,252 ㎡を測る。

基本的土層堆積状況は、第 1 調査区と同じで、耕作土、床土、包含層、黄褐色粘質土（地山）であることが判明した。遺構は、この地山から掘り込まれており、遺構の検出高は標高 10.7m 前後である。黄褐色粘質土の地山は、ほぼ平坦で第 1 調査区と同じく、粘土を採取する際に削平されたものと考えられる。1 部床土から遺構状の落ちが確認できたが、その遺構状から出土遺物もなく、埋土も淡灰色を呈しており、不明であるが掘り込みの形状などから遺構と判断でき、第 2 調査区は遺構面が 2 時期存在するものと考えられる。

検出した主な遺構には、鋤溝 12 条（SD01～10、16）、溝状遺構 7 条（SD23、29、82、85～87）、井戸 1 基（SE120）、大型土坑 1 基（SK11）、土坑 3 基（SK17、26、83）、柱穴群から構成される建物跡である。鋤溝は、一定の間隔を持って、現状の地割に沿って東西方向で検出した。第 1 遺構面では、鋤溝、井戸、大型土坑などが属し、中世以降のものと判断できる。第 2 遺構面では柱穴群、溝状遺構 7 条など中世でも前半から、古代、古墳時代のものが属するものと考えられる。

調査区北端 3m 幅の範囲は、北側に隣接する水田の水が絶えず浸透してきており、遺構検出が不可能であった。さらに、調査区北側に、道路施工予定地が 2m 幅で、東西方向に設計されており、その部分は掘削が及ばないため、高台で残している。

鋤溝（SD01~10、16）

第 2 調査区東側 2/3 に約 2m 間隔で 11 条の溝状遺構を検出した。これらの溝は、調査区東側から始まり、西側に向かってながれ、約 25m 前後で終焉を迎える。幅約 40cm 前後、深さ約 15cm 前後測る。南北方向の鋤溝は見られなかった。埋土は、褐灰色細砂を呈している。遺物はほとんどの溝から出土している。

土師器

土師器小皿（11）は、灰白色を呈し、口縁端部のみ濃い灰色をしている。底部はヘラ切りされており、体部は外上方に短く伸びる。SD04 から出土した。

土師質土器

土師質土器羽釜（12）と考えられる。細く立ち上る口縁部と、短く水平方向に伸びる鍔部からなる。外面はナデ、内面は細かい刷毛目調整がされている。中世前半のものと考えられ、SD02 から出土している。

土師質土器火鉢（13）は、外面には粗い刷毛目調整を施し、1 条の沈線が見られる。直線的に外反する口縁端部は、肉厚である。中世のものと考えられ、SD03 から出土した。

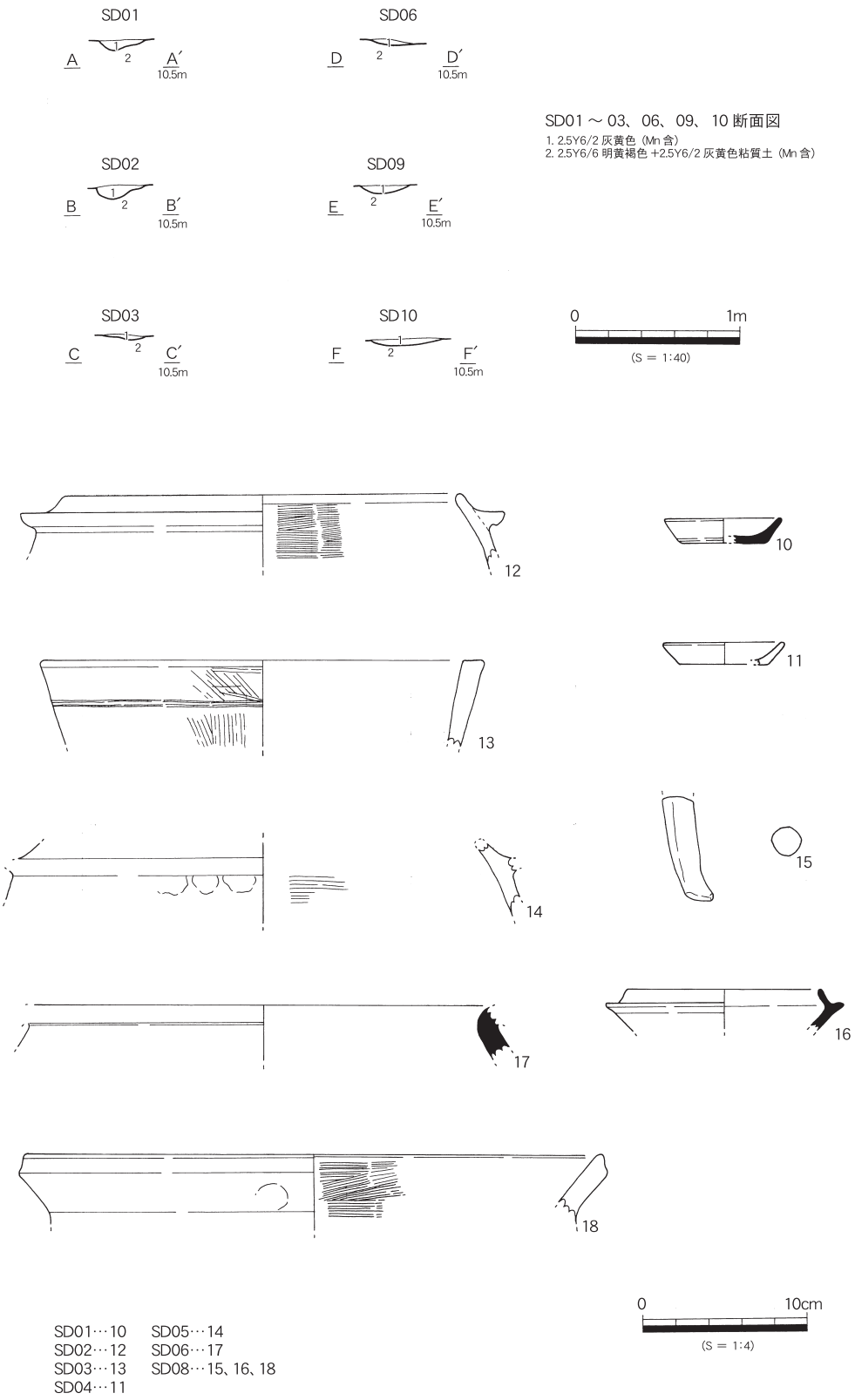
土師質土器羽釜（14）と考えられる。口縁部と鍔部が破損しており詳細は不明だが、細く内湾する口縁部と、短く水平に伸びると思われる鍔部である。外面指オサエ、内面刷毛目調整がなされている。11 と同様の時期と考えられる。SD05 から出土した。

土師質土器羽釜（15）は、脚部で灰黄褐色を呈し、やや細く脚先が平坦になっている。SD08 から出土した。

土師質土器土釜（18）である。体部が胴長を呈するものと考えられる。内面には刷毛目調整が施されている。中世前半のものと考えられる。SD08 から出土した。

須恵器

須恵器皿（10）は、残存率が小片で口径を復元できなかった。灰白色と明黄褐色を呈しており、緩やかに外反し口縁端部に至る。中世のものと考えられ、SD01 から出土した。



第17図　SD01～03、06、09、10　断面図　鋤溝出土遺物実測図

須恵器杯身（16）である。SD08 の基盤層から出土した。流れ込んだものと考えられる。胴部のたちあがりは、内傾して端部は丸い。受部は鋭く上外方に向いている。7 世紀前半のものと考えられる。SD08 から出土している。

須恵器甕（17）は、回転ナデ調整から外面体部は叩きが施される。大型で残存率は小片であるが時代が判別できた。中世前半 13 世紀前半のものと考えられる。SD06 から出土している。

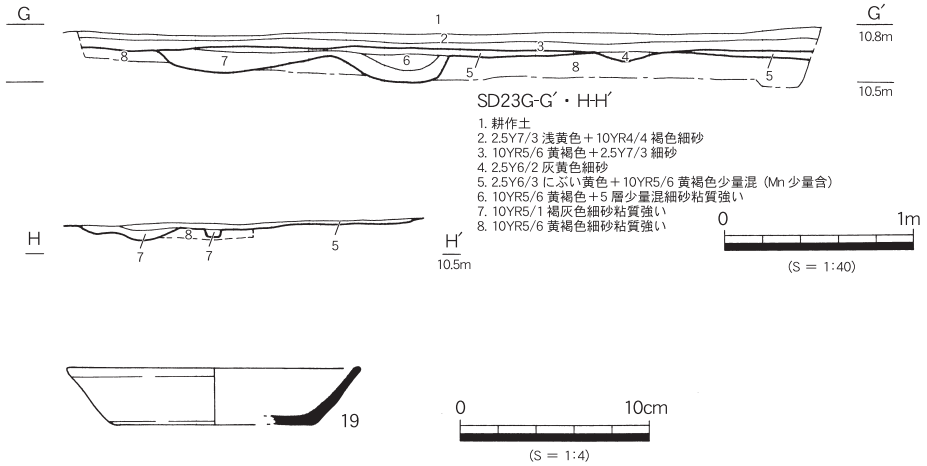
SD23

第 2 調査区東端において、南北方向に検出した。幅約 1.5m、長さ約 8.5m 分を検出した。北端で 2 つに分岐し、中央で合流し南側の試掘トレンチにぶつかる時また 2 つに分岐している。分岐した 1 支流の幅は、約 0.8m 前後、長さ約 2m 分である。南側も同様である。

3 箇所のセクションを設け断面を観察したが、分岐する埋土と中央で合流している埋土と同じで、褐灰色粘質土を呈し、深さ約 5～20cm あり、南に向けて浅くなり、調査区中央を横断する試掘トレンチの付近で消滅している。須恵器杯（19）が出土しており、古代の水路であったものと考えられる。

須恵器

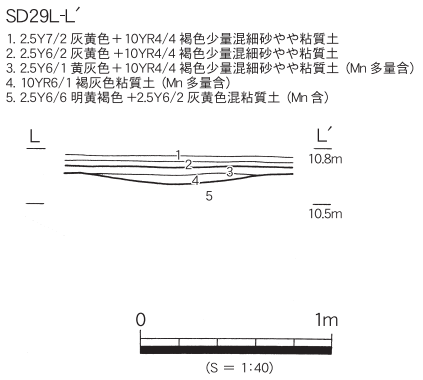
須恵器杯身（19）は、底部は比較的平らである。口縁部は、底部から上外方に伸び端部は丸く仕上げられている。8 世紀後半のものと考えられる。



第18図　SD23　断面図　出土遺物実測図

SD29

第 2 調査区北東部で検出した。鋤溝 SD01~05 によって切られており、東西方向で検出した。幅約 70 ㎝、長さ約 8.5mを測り、南北方向に延びる溝状遺構である。南端は、SD05 に切られて終了している。断面観察のため北端にセクションを設定した。深さ約 5 ㎝前後で褐灰色細砂を呈している。出土遺物はない。



第19図　SD29　断面図

SD82

第 2 調査区中央において検出した。幅約 60 ㎝、長さ約 6.7m を測り、東西方向に延びる溝状遺構である。西端を試掘トレンチで切られており、全長は不明である。灰黄色細砂を呈しており、出土遺物はない。SD82 の検出方向は、鋤溝の方向や SD 85～87 の方向とも違うが、時代や性格に

ついて不明である。

SD85

第 2 調査区北西隅において、3 条の溝状遺構を検出した。その内の一番東側に位置する溝状遺構を SD85 とした。幅約 30～50cm、深さ 15cm 前後を測り、長さ約 20m 分を検出した。調査区北側からほぼ南方向に流れており、第 1 調査区において検出した SD01 の延長と考えられる。本調査地全体では約 55m 分を検出したことになる。

1 箇所のセクションを設定し、土層断面と埋土を観察、深さを確認した。土層堆積状況は、単層で黄灰色粘質土を呈している。出土遺物はない。

SD86

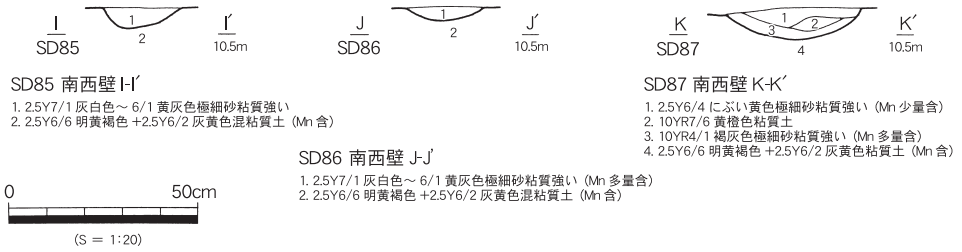
第 2 調査区北西隅で検出した。SD85 の北側に位置し、幅 20～40cm、深さ 10cm 前後を測り、長さ約 13.8m 分を検出した。SD86 に並行して調査区北側からほぼ南に流れており、第 1 調査区において検出した SD02 の延長と考えられる。本調査地全体では約 40m 分を検出したことになる。

3 箇所のセクションを設定し、土層断面と埋土を観察、深さを確認した。土層堆積状況は、単層で黄灰色細砂（粘質強い）を呈している。出土遺物はない。

SD87

第 2 調査区北東隅で検出した。SD86 の北側に位置し、幅 40～80cm、深さ 15cm 前後を測り、長さ約 10.3m 分を検出した。SD85、86 に並行して調査区北側からほぼ南に流れており、第 1 調査区において検出した SD03 に延長するものと考えられる。本調査地全体では約 30m 分を検出したことになる。

6 箇所のセクションを設定し、土層断面と埋土を観察、深さを確認した。土層堆積状況は、単層で灰黄色細砂（粘質強い）を呈している。出土遺物はない。



第20図　SD85～87　断面図

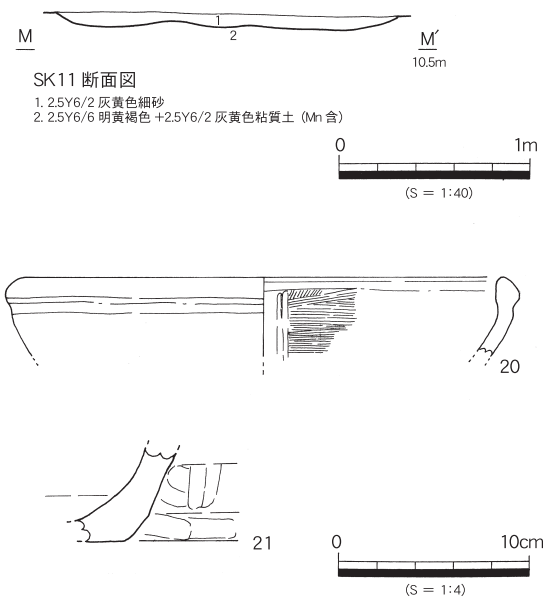
SE120

第 2 調査区南東部隅において検出した。掘り方は一辺約 2.8m の隅丸方形を呈している。枠は一辺約 1.2m と約 1.0m のやや長方形を呈している。縦板横桟組の構造を持ち、大小の縦板を前後に重ね合わせ、四隅および横桟の丸太材で固定している。上部付近には、裏込めに使用した直径 30～50cm の丸石が置かれていた。枠内からの出土遺物はなかった。鋤溝の SD10 を切っており、鋤溝の時代よりも新しいものと考えられる。

SK11

第2調査区南端において検出した。東西に細長く幅約1.8m、深さ約5cm前後を測り、長さ約21mの土坑を検出した。

1箇所のセクションを設定し、土層断面と埋土を観察、深さを確認した。土層堆積状況は、単層で灰黄色細砂を呈している。出土遺物は、須恵器片、土師質土器片、陶器片などである。



第21図　SK11　断面図　出土遺物実測図

土師質土器

土師質土器の擂鉢（20）と考えられる。口縁内面に細かい刷毛目調整が見られ、その上から擂りの目を施している。16世紀のものと考えられる。

陶器

備前系の甕底部片（21）と考えられる。ヘラケズリが見られる底面から直線的に外上方に延びる体部を若干持つ。中世後半のものと考えられる。

SK17

第2調査区東端において検出した。調査区設定の問題から東側を検出できなかったので、詳細な数字は不明であるが、直径1.3mの隅丸方形の土坑と考えられる。調査区東壁断面図より、深さ35㎝を測り、灰白色細砂に黄褐色粘質土が多く含まれた埋土を呈している。出土遺物はない。

SK26

第2調査区東端において検出した。調査区設定の問題から東側を検出できなかったので、詳細な数字は不明であるが、長軸3.7m、短軸20㎝を測る。調査区東壁断面図より、深さ約65㎝を測り、灰黄色細砂を呈している。出土遺物はない。

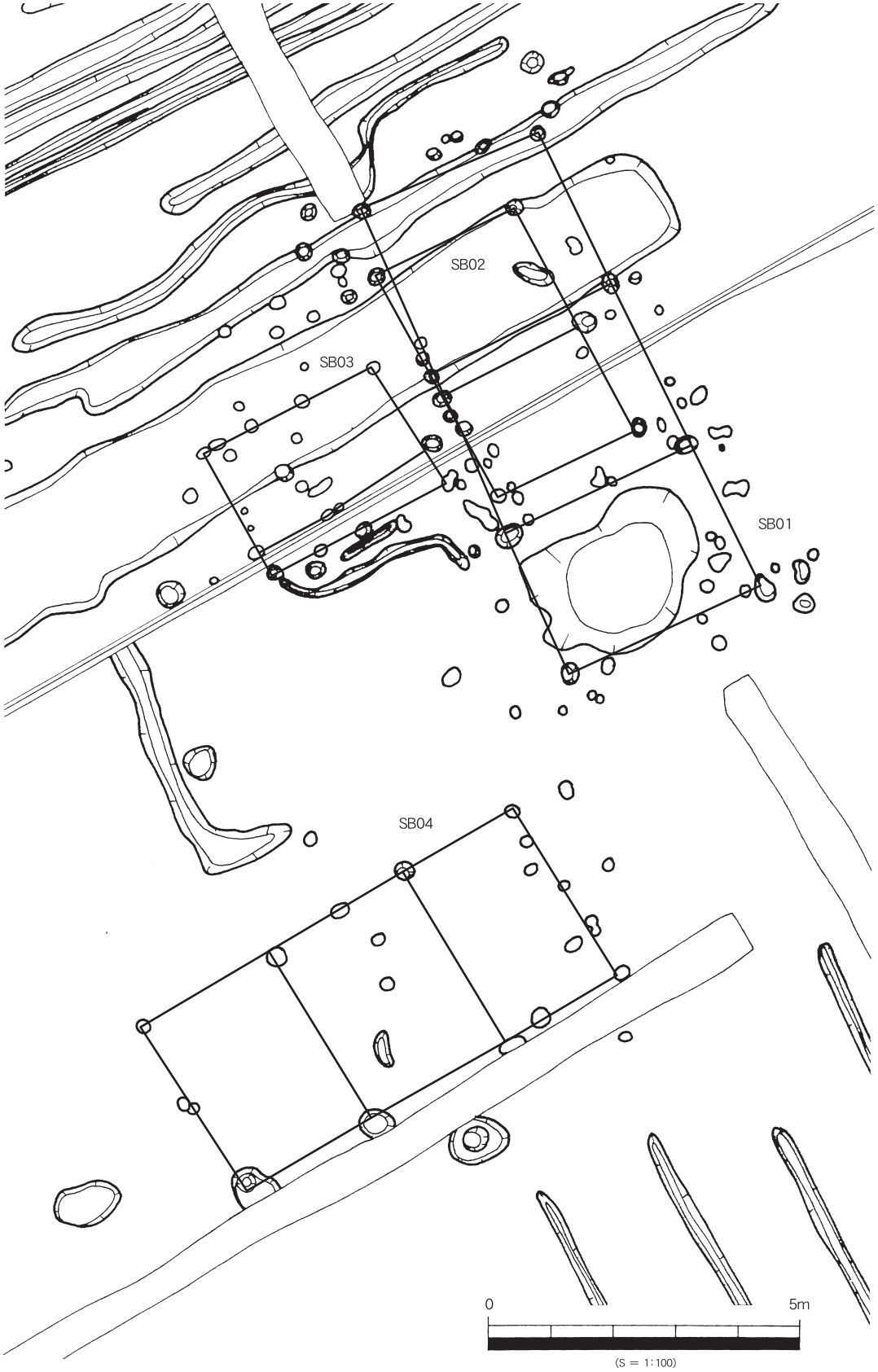
柱穴群

第2調査区において検出した柱穴は50基以上検出した。いくつかの柱穴は、第3調査区の柱穴群と併せると掘立柱建物3棟とその付属施設として復元できた。建物として復元できなかった柱穴群に関しては、柵列なども考えられたが、条件が不足しているため今回の検討では言及するまでには至らなかった。

第3調査区の建物跡も含めると4棟検出し、SB01~04と表記している。SB01～03は第2調査区と第3調査区にわたって検出しているため、この章での報告とする。

SB01

第2調査区南端から第3調査区北端にかけて検出した。8基の柱穴からなる1間×3間の側柱建物である。柱穴は、ほぼ直線的に揃っている。



第22図　掘立柱建物　配置図

各柱穴は、直径約 20～50cm、深さ約 18～35cm を測る。主軸は北から 25° 西に振り、南北方向の建物である。平均柱間距離は、約 2.4m であるが、南側の梁行は約 3m ありやや長い。遺物は柱穴 4 基から出土しており、須恵器片、土師質土器片が出土している。

土師質土器

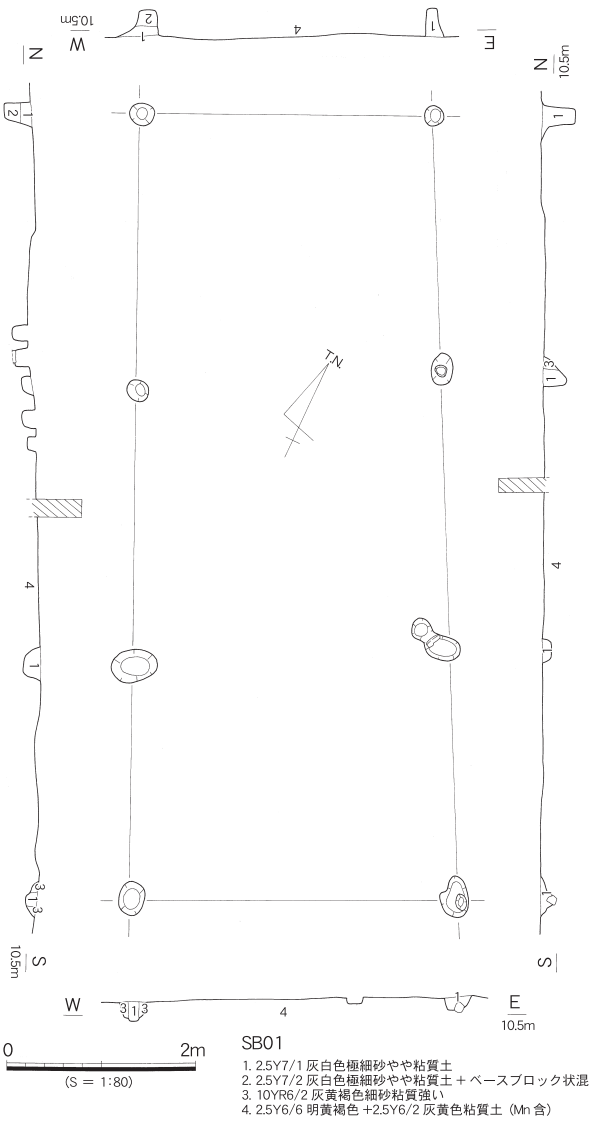
土師器小皿（22）は、残存率が小片で底径を復元できなかった。灰白色と灰黄褐色を呈しており、緩やかに外反し口縁端部に至る。中世のものと考えられる。

土師器小皿（23）は、灰白色と浅黄橙色を呈し、底部はヘラ切りされており、体部は外上方に短く延びていくものと考えられる。中世のものと考えられる。

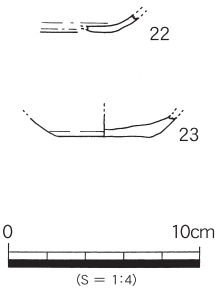
SB02

各柱穴は、直径約 20～35cm、深さ約 10～40cm を測る。主軸は北から 25° 西に振り、SB01 と同方位で南北方向の建物である。平均柱間距離は、約 1.75m であるが、南北の梁行は約 2.3m とやや長い。

第 2 調査区南端から第 3 調査区北端にかけて検出した。SB01 の中に検出でき、SB01 との併存していた可能性は低く、先後関係は不明である。6 基の柱穴からなる 1 間×2 間の側柱建物である。柱穴の配置は直線的であるが、東辺がやや歪んで延びている。柱穴 2 基から土師器片が出土しているが、小片のため図化できなかった。



第23図　SB01　平・断面図



第24図　SB01　出土遺物実測図

SB03

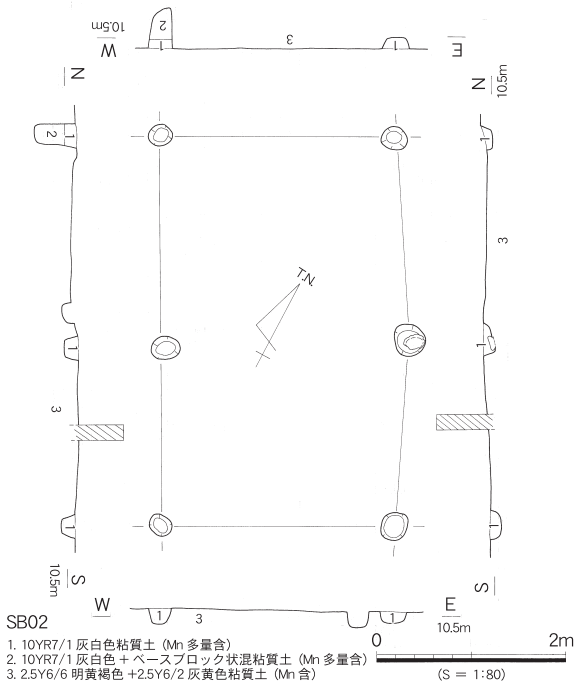
第 2 調査区南端に身舎を検出し、第 3 調査区北端では廂を検出した。SB01・02 の西側に隣接している。1 間×2 間の側柱建物である。主軸方位は、北から 30° 西に振り、東西方向の建物である。北辺部では桁行の中間柱穴が見られない。南側には廂状の柱穴を 3 基検出した。各柱穴は、直径約 20～35 ㎝、深さ約 10～25cm を測る。また、柱穴内には柱痕が断面観察から判明できるものもあった。廂部分の柱穴内には、地下式礎石が確認できた。

さらに、建物に並行する東西方向の溝状遺構（第3調査区SD63）を検出し、雨落溝の可能性も考えられる。溝は、幅約15cm、深さ約10cm前後を測り、埋土は淡灰色細砂を呈している。

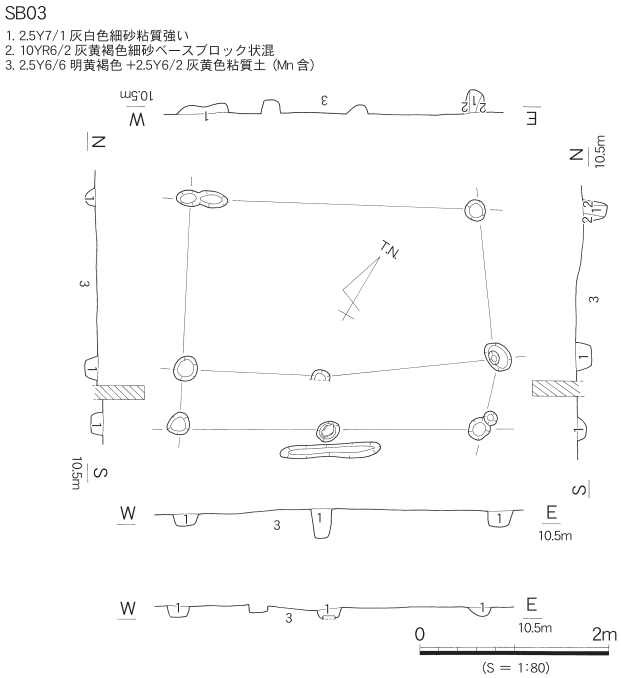
出土遺物は、雨落溝のSD63から土師器小皿が出土している。

土師器

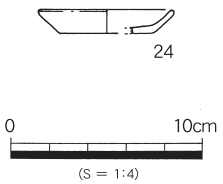
土師器小皿（24）は、灰黄褐色を呈し、底部は糸切りされており、体部は外上方に短く延びている。中世のものと考えられる。



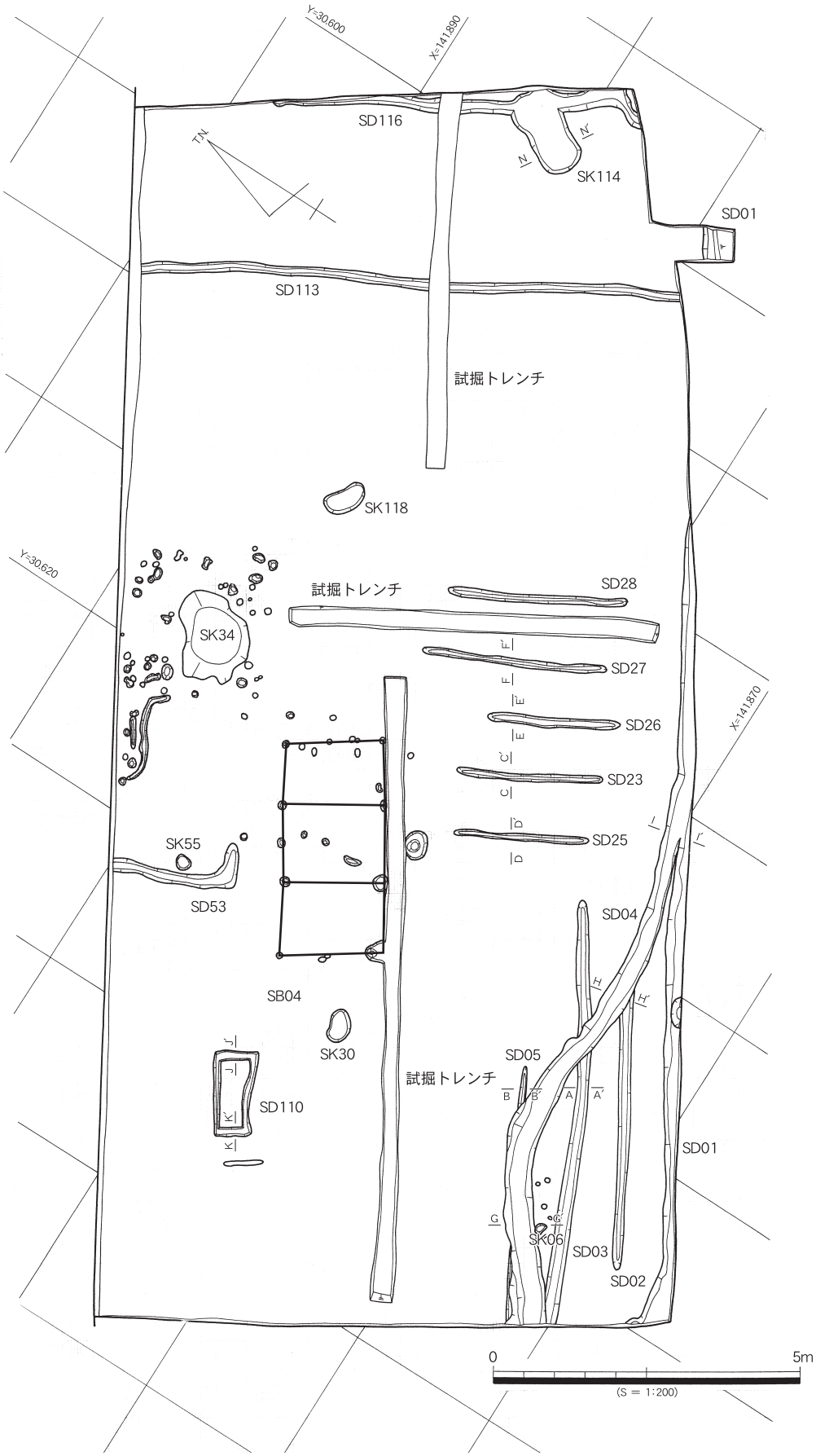
第25図　SB02　平・断面図



第26図　SB03　平・断面図



第27図　SB03　出土遺物実測図



第28図　第３調査区　遺構平面図

第3調査区の概要

発掘調査対象地を3分割したうち、最も南側に位置する調査区である。平面形はほぼ長方形を呈して短辺約19m、長辺約42mで、面積約798㎡を測る。

基本的土層堆積状況は、第2調査区と同じで、耕作土、床土、包含層、黄褐色粘質土（地山）であることが判明した。遺構は、この地山から掘り込まれており、遺構の検出高は標高10.7m前後である。黄褐色粘質土の地山は、ほぼ平坦で第1調査区と同じく、粘土を採取する際に削平されたものと考えられる。

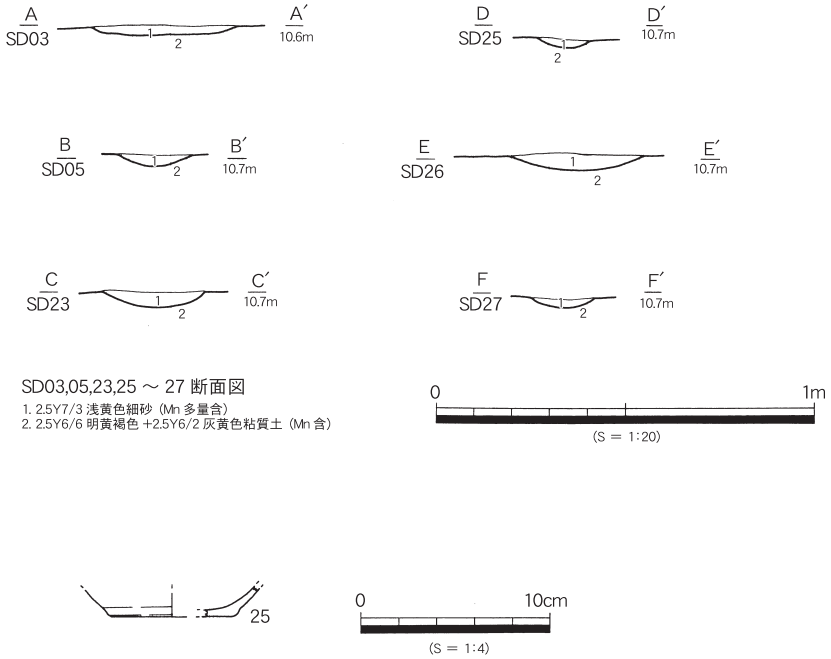
検出した主な遺構には、鋤溝8条（SD02、03、05、23、25～28）、溝状遺構8条（SD01、04、53、61、63、110、113、116）、不明土坑1基（SK114）、柱穴群である。鋤溝は、一定の間隔を持って、現状の地割に沿って南北・東西方向で検出した。

鋤溝（SD02、03、05、23、25～28）

第3調査区東側1/3に約2m間隔で南北方向に5条、東西方向に3条の溝状遺構を検出した。幅約40cm前後、深さ約15cm前後測る。第2調査区に比べ、最大でも約14mしか残存していない。短くて約4mであった。埋土は、褐灰色細砂を呈している。遺物はSD23から出土している。

土師器

土師器皿（25）は、黄灰色とにぶい黄橙色を呈しており、外上方に短く延びていると考えられる体部を持つ。摩滅が激しく調整は不明である。



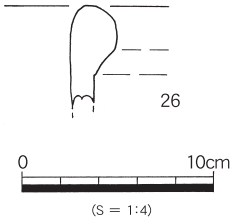
第29図　SD03・05・23・25～27　断面図　鋤溝出土遺物実測図

SD01

第3調査区東端において東西方向で検出した。調査区東壁に沿って幅約50～90cm、長さ約26m分を検出した。北端から15mのところで、弥生時代のSD04を切っている。地形に沿って東に延びているようで、調査区東端から西に5m付近に幅約1m、

長さ約 2.5m の拡張区内で SD01 の延長を検出した。

2 箇所のセクションを設け断面を観察し、SD04 と合流している箇所では、SD01 が切っており、時代が新しいものと考えられる。埋土は、褐灰色粘質土を呈し、深さ約 15cm 前後あり、東に向けて浅くなり、現状の地割に沿っていることから、条里に関係する溝の可能性も考えられる。出土遺物は、備前系甕が出土している。



第30図　SD01　出土遺物実測図

備前系甕

備前系甕（26）の口縁部で、垂直にたちあがり、端部を押さえつけたような玉縁状になる。玉縁の
下側をケズリ、頸部はナデ調整していることがこの時期の特徴になる。15 世紀後半～16 世紀前半のものと考えられる。

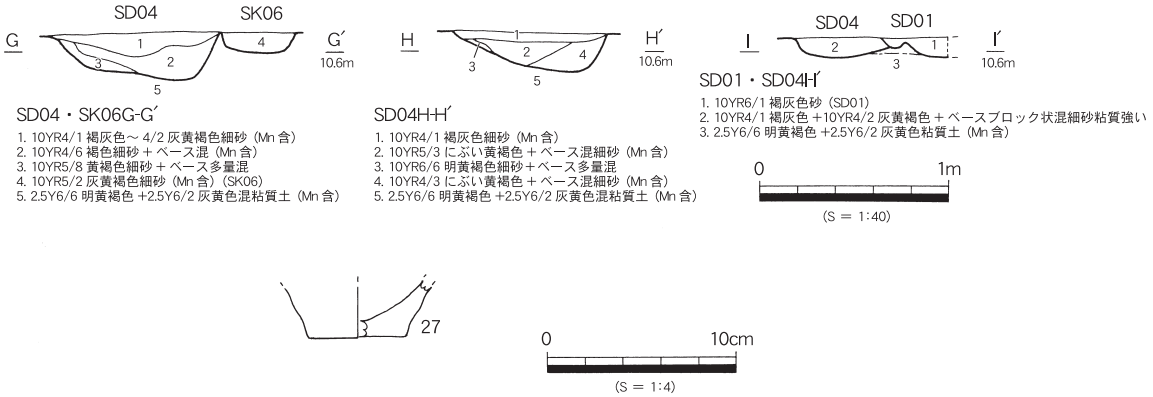
SD04

第 3 調査区東側において検出した。鋤溝 SD02、03、05 を完掘すると輪郭が明瞭に現れ、鋤溝よりも時代が古いことがわかった。調査区西端から始まり、緩やかに南側に下方して、SD01 に合流し SD04 の検出は終了した。幅約 1.0m、深さ約 23cm、長さ約 18m 分検出した。

3 箇所のセクションを設け、土層断面と埋土を観察、深さを確認した。土層堆積状況は、灰褐色細砂で硬く締まっている。底部から肩にかけて、掘り込んだ際に見られるベースをブロック状に多く含む層が見られた。出土遺物は弥生土器の底部が出土している。

弥生土器（27）

黄褐色を呈し、胎土はやや粗い。摩滅が激しく調整は不明である。



第31図　SD04　断面図　出土遺物実測図

SD53

第 3 調査区北端において検出した。長さ約 5m、幅約 0.5～1.0m、深さ約 5cm 前後を測る。南北方向に流れ、北から南に 4m の部分で東側に屈曲し約 1m 延長したところで終了する。

セクションを 1 箇所設け、土層断面と埋土を観察、深さを確認した。土層堆積状況は、単層で灰黄色細砂を呈する。出土遺物はない。

SD61

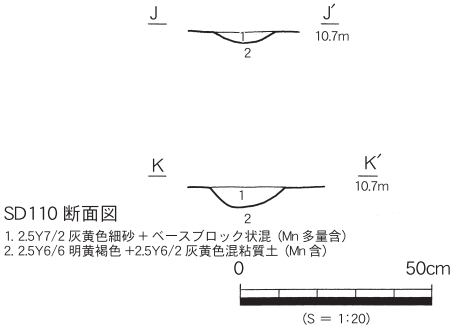
第3調査区北端において検出した。長さ約3m、幅約20cm、深さ約10cm前後を測る。北から南に緩やかに屈曲し東方向に延びたあと緩やかに南方向に屈曲し終了する。

セクションを1箇所設け、土層断面と埋土を観察、深さを確認した。土層堆積状況は、単層で灰黄色細砂を呈する。出土遺物はない。SB03の南側に隣接しており、建物に附属する雨落溝の可能性も考えられる。

SD110

第3調査区西側において検出した。幅約30～50cmの溝が、深さ約10cm前後、1辺約1.2mと約2.5mの長方形に囲うように検出した。

セクションを2箇所設け、土層断面と埋土、深さを確認した。土層堆積状況は、単層で灰黄色細砂を呈している。出土遺物はない。



第32図　SD110　断面図

SD113

第3調査区東側において南北方向の溝を検出した。幅約30cm、長さ約17.5m、深さ約15cm前後を測る。調査区の北端から南端まで検出しており、第2調査区に延長しているものと推測されたが、第2調査区での検出は見られなかった。

セクションを2箇所設け、土層断面と埋土、深さの確認をした。土層堆積状況は、単層で淡灰黄色細砂を呈している。先述した鋤溝の方向や間隔が似ていることから、鋤溝の可能性が高いものと考えられる。出土遺物はない。

SD116

第3調査区東端において調査区東壁に沿って検出した。幅約75cm、長さ約11.5m、深さ約10cm前後を測る。調査区設定の問題から、長さ約11.5m分を検出したが、おそらく現状の地形に沿って延長しているものと考えられる。

セクションを2箇所設け、土層断面と埋土、深さを確認した。土層堆積状況は、単層で淡灰黄色細砂を呈している。SD113と並行していることや、溝の規格から鋤溝の可能性も考えられる。

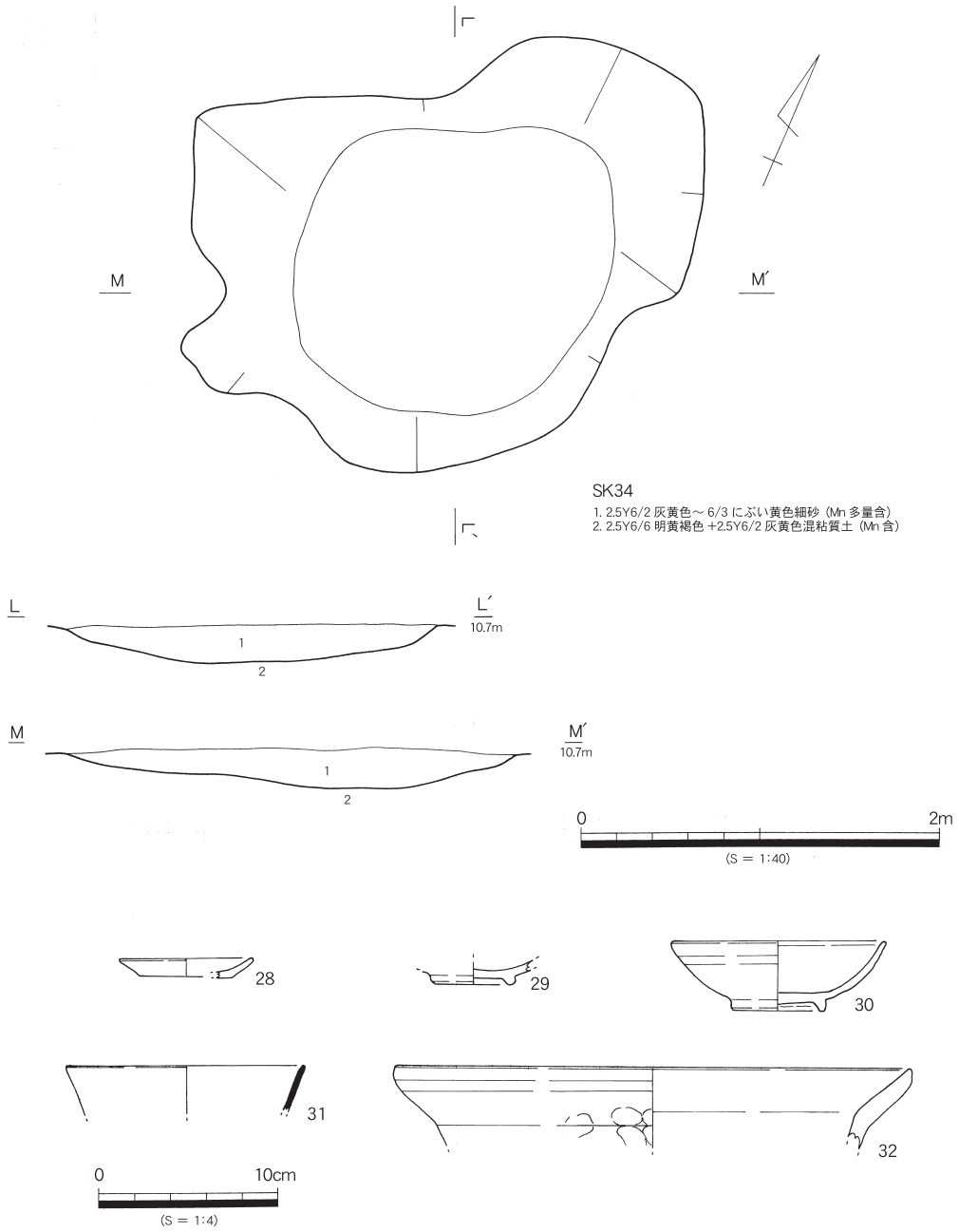
SK34

第3調査区北側中央において検出した。長軸約3.0m、短軸約2.1m、深さ約20cm前後を測り、不定形な楕円形を呈している。

東西方向と南北方向に土層観察用ベルトを設け、断面と埋土、深さを確認した。土層堆積状況は、単層で灰黄色細砂を呈している。SB01の建物内部に設けられていると考えており、同時期のものと考えられるが、この土坑の性格については不明である。出土遺物は、土師器、須恵器、土師質土器が出土している。

土師器

土師器皿（28）は、器壁が薄く低い。外上方へ延びる体部とそこからやや内湾気味に延びる口縁部をもつ。口縁部は、丸く収められている。土師器椀（30）は、ほぼ完形で、高台を持つ椀である。高台は貼付されている。調整は横ナデを施している。13世紀のものと考えられる。土師器椀（29）は、高台部分のみで、（30）と同様に貼付されている。



第33図　SK34　平・断面図　出土遺物実測図

須恵器

須恵器椀（31）は、口縁部が黒く、回転ナデ調整されているため西村産のものと考えられる。

土師質土器

土師質土器土鍋（32）である。屈曲が明瞭でない外面に指頭痕が見られ、内外面には横ナデ調整が施されている。

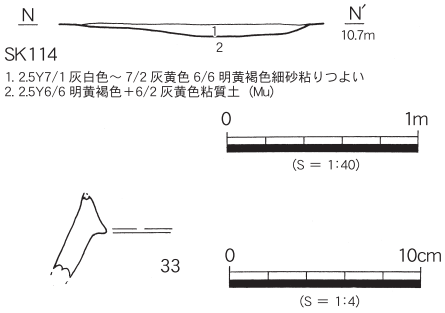
SK114

第3調査区東端で、SD116に切られて検出した。長軸約2.2m、短軸約1.4m、深さ

約 10 ㎝前後を測り、楕円形を呈している。埋土は、灰色粘質土で土師質土器を出土している。

土師質土器

土師質土器鉢（33）は、口縁端部下方を摘みだし、器壁はやや厚く胎土も粗い。中世のものと考えられる。



第34図　SK114　断面図　出土遺物実測図

柱穴群

第 3 調査区において検出した柱穴は 50 基以上検出した。いくつかの柱穴は、第 2 調査区の柱穴群と併せると掘立柱建物 3 棟とその付属施設として復元できた。建物として復元できなかった柱穴群に関しては、柵列なども考えられたが、条件が不足しているため今回の検討では言及するまでには至らなかった。SB01～03 は、第 2 調査区において報告したので、SB04 について述べる。

SB04

第 3 調査区中央において検出した。10 基の柱穴からなる 2 間×3 間の側柱建物である。柱穴は、ほぼ直線的に揃っている。各柱穴は、直径約 20～80cm、深さ約 15～35cm を測る。主軸は北から 33°西に振り、東西方向の建物である。平均柱間距離は、約 1.9m である。

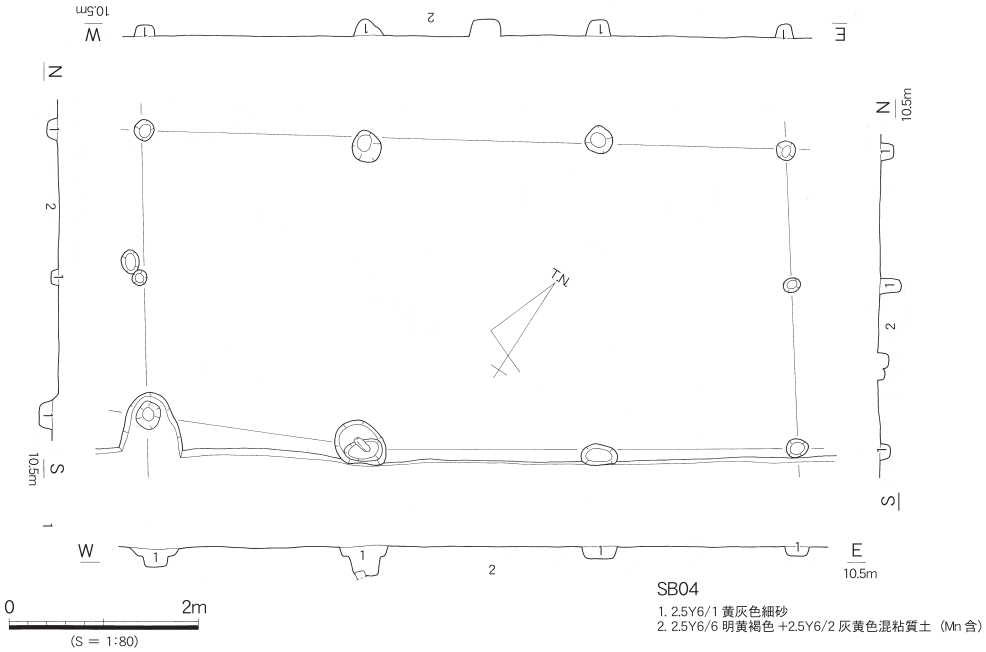
遺物は柱穴 2 基から出土しており、石鏃、土師器片が出土している。

石鏃

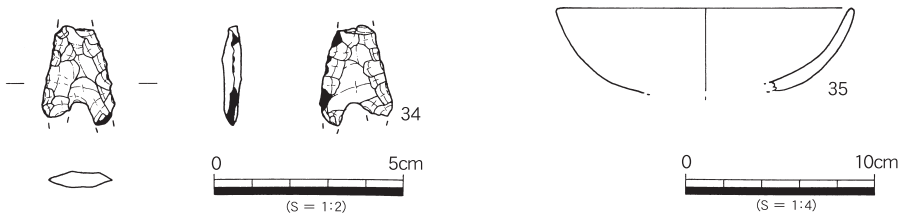
石鏃（34）は、凹基式の石鏃である。背面に素材面を残す。風化が激しく弥生時代の遺物が混入した可能性が考えられる。先端と基部が破損しており、最大長（2.6cm）、最大幅 1.9cm、最大厚 5mm、重量 1.9g である。

黒色土器

黒色土器椀（35）は、器壁が厚く、体部は内湾し外上方に延びる。底部はヘラ切りしている。内面には、炭のようなものがうっすら確認でき、燻したものが剥がれたものと考えられる。10 世紀後半から 11 世紀初頭のものと考えられる。



第35図　SB04　平・断面図



第36図　SB04　出土遺物実測図

第4章　まとめ

検出した遺構・遺物の内容から、飯野西分広定遺跡について簡潔にまとめ、今後の調査に役立てたい。

1．古墳時代

第1調査区及び第2調査区で検出した、溝3条である。土器の観察から初頭のものと考えられる。当該地南に聳える飯野山は、弥生時代の集落の上に古墳を築造しており、現在でも後期の古墳が4基存在していることが知られている。当該地南に隣接する藤高池では、弥生時代の遺物が採集されているなど、この時代の遺跡が広がっている可能性は高いものと考えられ、周辺にも集落遺跡が点在していたものと考えられる。

2．古代・平安時代

第2調査区東端において、南北方向に検出した溝SD23である。8世紀後半の須恵器杯身を出土しており、鋤溝にも切られて検出していることから、比較的古い時期の水路に使用した溝と考えられる。

第3調査区において東西方向に検出した、掘立柱建物SB04である。2間×3間で面積は約22.4㎡を測る小型のものである。居住施設として存在していたのかは、不明である。2基の柱穴から石鏃と黒色土器椀が出土している。石鏃は、弥生時代の混入であると考えられるが、黒色土器は10世紀後半から11世紀初頭のものと考えられ、周辺の柱穴群からは中世の土師器片などが出土しており、平安時代から鎌倉・室町時代にかけて存在していたものと想定できる。

3．鎌倉・室町時代

第2調査区及び第3調査区において3棟検出した掘立柱建物SB01～03である。SB01は、1間×3間で面積は約27.4㎡を測るやや小型の建物である。SK34がこの建物内部に設けられており、同時期のものと考えているが、この土坑の性格については不明である。出土遺物は、土師器、須恵器、土師質土器が出土しており、SB01と同様の13世紀のものと考えられる。

SB02は、SB01の内部で南北方向に検出した。1間×2間で面積は約9.8㎡を測る小型の建物である。柱穴2基から土師器片が出土しているが、小片のため図化できなかったため、詳細は不明である。

SB03は、SB02の西側に隣接して検出した。廂及び雨落溝などの附属施設を擁している。1間×2間で面積は約5.8㎡を測る小型の建物である。出土遺物から中世でもやや新しいものと考えられ、SB01より新しいものと考えられる。

第2調査区及び第3調区において検出した複数の鋤溝である。この溝から出土した備前系甕が15世紀後半から16世紀前半のものと考えられ、その他にも土師質土器羽釜、土鍋などから日常雑器が出土していることから、埋没時期の上限は、16世紀ころと求められる。

最後に、時代は不明であるが、第2調査区東端で検出した井戸である。縦板組横桟隅柱留井戸で、古くは藤原宮など7世紀後半に見られるが、この遺跡で古代の遺構は、ほとんど検出できなかったことから中世以降のものと推測できる。

掘立柱建物と鋤溝、井戸を必ずしも同時代の関連するものとは位置付けることはできないが、飯野西分広定地域の中世における土地利用の在り方を考える上で、重要な資料であることは確かである。

土器実測一覧表

挿図 写真図版	調査区 出土遺構	種別 器種	口径―器高―底径（cm） 残存率	胎土	焼成色調	特記事項
1	第１調査区 SD01	土師器 鉢	（15.8）－7.3－※ 口縁部 3/8	やや粗い：φ１㎜以下石英長石含	2.5Y7/2 灰黄色	
3	第１調査区 SD04	須恵器 杯蓋	（17.0）－（1.3）－※ 口縁部小片	密：φ１㎜以下黒色粒子少量含	N6/0 灰色	
4	第１調査区 SD04	須恵器 杯身	（8.4）－（2.2）－※ 底部 2/8	密：φ１㎜以下黒色粒子含	2.5Y7/1 灰白色	
5	第１調査区 SD04	須恵器 杯身	（14.8）－3.8－（10.8） 口縁部 2/8	密：φ１㎜以下黒色粒子含	N7/0 灰白色	
6	第１調査区 SD04	土師器 土釜	（32.4）－（5.8）－※ 口縁部小片	粗い：φ1～5㎜石英長石多量含	7.5YR7/3 にぶい橙色 7.5YR4/6 褐色	
7	第１調査区 SD04	須恵器 皿	（15.4）－2.1－（12.4） 口縁部 2/8	やや密：φ１㎜以下石英長石多量含	2.5Y8/1 灰白色 7.5YR8/2 灰白色	
8	第１調査区 SD08	須恵器 皿	※－（1.35）－（19.6） 底部 1/8	密：φ１㎜以下白色・黒色粒子含	N7/0 灰白色	
9	第１調査区 SK09	須恵器 壺	（21.8）－（4.0）－※ 口縁部 1/8	密：φ１㎜以下黒色粒子含	N3/0 暗灰色 N5/0 灰色	
10	第２調査区 SD04	須恵器 小皿	（7.0）－1.5－（2.5） 口縁部 2/8	密	2.5Y7/1 灰白色	
11	第２調査区 SD08	土師器 小皿	（7.4）－1.3－（5.4） 口縁部 1/8	密：φ１㎜以下石英長石少量含	2.5Y8/3 淡黄色	
12	第２調査区 SD02	土師質 羽釜	（23.6）－（4.2）－※ 口縁部 1/8	密：φ１㎜以下石英長石多量・ 黒色粒子少量含	2.5Y6/2 灰黄色 2.5Y8/2 灰白色	
13	第２調査区 SD03	土師質 鉢	（26.8）－（5.8）－※ 口縁部小片	やや粗い：φ１㎜以下石英長石少量・ 雲母片・赤色粒子少量含	10YR5/6 黄褐色 2.5Y6/4 にぶい黄色	
14	第２調査区 SD05	土師質 羽釜	※－（4.5）－※ 胴部 1/8	密：φ１㎜石英長石少量・ 雲母片・黒色粒子少量含	2.5Y7/3 浅黄色 2.5Y6/6 明黄褐色	
15	第２調査区 SD08	土師質 羽釜	※－（6.5）－※ 胴部小片	密：φ１㎜以下石英長石・ 黒色粒子含	10YR6/2 灰黄褐色 10YR6/6 明黄褐色	
16	第２調査区 SD08	須恵器 杯身	（11.8）－（2.55）－※ 口縁部 1/8	密：φ１㎜以下石英長石含	N8/0 灰白色	
17	第２調査区 SD06	須恵器 甕	※－（3.3）－※ 頸部小片	密：φ１㎜以下黒色粒子少量含	10YR6/1 褐灰色 2.5Y7/1 灰白色	
18	第２調査区 SD08	土師質 土鍋	（35.2）－（4.4）－※ 口縁部小片	密：φ１㎜以下石英長石・ 雲母片・黒色粒子少量含	10YR4/2 灰黄褐色 10YR7/4 にぶい黄橙色	
19	第２調査区 SD23	須恵器 杯身	（15.4）－3.0－（10.4） 口縁部 2/8	密：φ１㎜以下黒色粒子少量含	N6/0 灰色	
20	第２調査区 SK11	土師質 擂鉢	（25.4）－（4.2）－※ 口縁部 1/8	やや密：φ１㎜以下石英長石・ 黒色粒子少量含	2.5Y8/3 淡黄色 2.5Y7/1 灰白色	
21	第２調査区 SK11	備前系 甕	※－（5.0）－※ 底部小片	密：φ１㎜以下石英長石少量含	2.5Y5/1 黄灰色 2.5Y5/2 暗灰黄色	
22	第２調査区 SB01	土師器 皿	※－（0.8）－※ 底部小片	密：φ１㎜以下石英長石・ 黒色粒子少量含	10YR8/2 灰白色 10YR6/2 灰黄褐色	

23	第２調査区 SB01	土師器 小皿	※－（1.2）－（5.0） 底部 3/8	密：φ１㎜以下石英長石少量含	2.5Y8/1 灰白色 10YR8/3 浅黄橙色	
24	第２調査区 SB02	土師器 小皿	（7.0）－1.25－（5.0） 口縁部 3/8	密：φ１㎜以下石英長石・ 黒色粒子・雲母片少量含	10YR4/2 灰黄褐色 10YR6/2 灰黄褐色	
25	第３調査区 SD23	土師器 皿	※－（1.6）－（7.8） 底部 1/8	密：φ１㎜以下黒色粒子少量含	10YR7/2 にぶい黄橙色	
26	第３調査区 SD01	備前系 甕	※－（5.5）－※ 口縁部小片	密：１㎜以下石粒少量含	7.5YR4/2 灰褐色	
27	第３調査区 SD04	弥生土器 底部	※－（5.2）－（3.1） 底部 4/8	やや粗い：φ1～6㎜石英長石多量含	10YR5/6 黄褐色	
28	第３調査区 SK34	土師器 小皿	（7.4）－1.1－（5.0） 口縁部 1/8	密：φ１㎜以下雲母片少量含	10YR8/2 灰白色	
29	第３調査区 SK34	土師器 椀	※－（1.35）－4.6 底部 8/8	密：φ１㎜以下石英長石・ 雲母片少量含	10YR6/2 灰黄褐色	
30	第３調査区 SK34	土師器 椀	11.8－3.9－5.0 口縁部 8/8	密：１㎜以下赤色・黒色粒子 少量含	10YR8/3 浅黄橙色	
31	第３調査区 SK34	須恵器 椀	（13.2）－（2.7）－※ 口縁部小片	密	N8/0 灰白色 N3/0 暗灰色（口縁部）	
32	第３調査区 SK34	土師器 土鍋	（28.6）－（4.5）－※ 口縁部小片	密：φ１㎜石英長石・砂粒多量含	10YR4/1 褐灰色 2.5Y7/3 浅黄色	
33	第３調査区 SK114	土師質 擂鉢	※－（4.5）－※ 口縁部小片	粗い：φ1～4㎜石英長石多量含	10YR7/3 にぶい黄橙色 7.5YR5/4 にぶい褐色	
35	第３調査区 SB04	黒色土器 椀	（15.4）－（4.3）－※ 口縁部 2/8	密：φ１㎜以下石英長石わずか含	5YR6/6 橙色	黒色部分が 剥がれる

石器実測一覧表

挿図 写真図版	調査区 出土遺構	器種	最大長（㎝）	最大幅（㎝）	最大厚（㎝）	重量（ｇ）	石材	特記事項
2	第１調査区 SD01	石匙	5.0	6.3	0.9	18.0	サヌカイト	
34	第３調査区 SB04	石鏃	2.6	1.9	0.5	1.9	サヌカイト	

写 真 図 版

調査前風景：北より

第 1 調査区全景：南より

図版 2

第 2 調査区全景：北より

第 3 調査区全景：西より

図版３

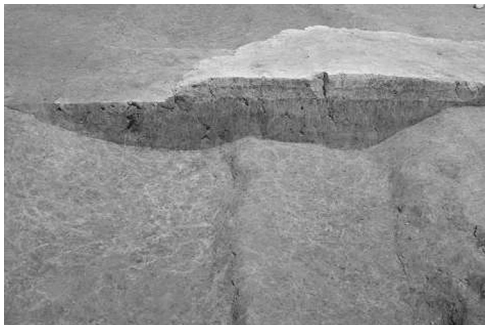
重機掘削風景：南より

人力作業風景：西より

SD01～03検出状況：南より

SD01遺物出土状況：南より

SD01～0完掘状況：北より



SD04P-P′断面：南より

SD04Q-Q′断面：南より

SD04完掘状況：北より

図版４　（第２調査区）

鋤溝検出状況：西より

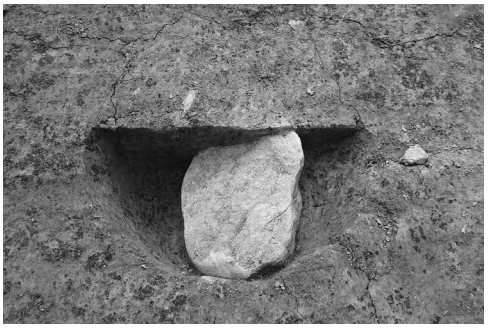
鋤溝完掘状況：南東より

SD23L-L′検出状況：南より

SD85～87完掘状況：南より

SE120検出状況：南より

SE120完掘状況：南より



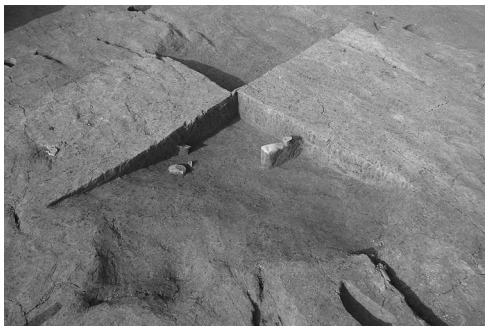
柱穴半裁状況：東より

柱穴群完掘状況：東より

SD01完掘状況：東より

SD04H-H′断面：西より

SD116完掘状況：北西より



SK34半裁状況：南より

SK34遺物出土状況：南西より

柱穴半裁状況：東より

柱穴半裁状況：東より

柱穴半裁状況：東より

図版 6　（第 3 調査区）

SK34周辺完掘状況：東より

SB04完掘状況：北西より

握立柱建物跡群：南東より

1

2

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

図版８　（出土遺物）

18

19

20

21

22

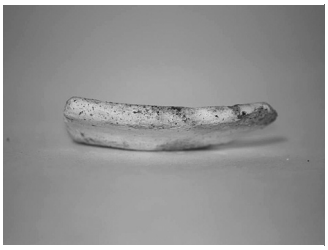
23

24

25

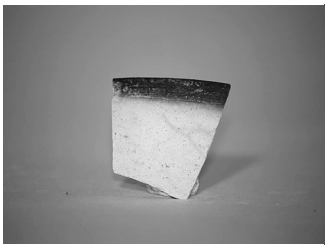
26

27


28

29

30


31

32

33

34

35

報告書抄録

ふりがな	いいのにしぶんひろさだいせき
書名	飯野西分広定遺跡
副書名	丸亀市立飯野保育園建設に伴う埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	丸亀市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第17冊
編著者名	著者　谷口梢　編集　東信男
編集機関	丸亀市教育委員会
所在地	〒763-0025　香川県丸亀市一番丁（丸亀市立資料館内）Tel　0877-22-6278
発行機関	丸亀市教育委員会
発行年月日	2014（平成26）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
いいのにしぶん 飯野西分 ひろさだいせき 広定遺跡	かがわけん 香川県 まるがめし 丸亀市 いいのちょう 飯野町	37202	156	34° 27′ 9″	133° 83′ 4″	2013. 0624 ～ 1005	2,723	飯野保育所園舎新築工事

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
飯野西分 広定遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 古代 中世	条里地割、 鋤溝、溝、 掘立柱建物、 井戸、土坑	石器、弥生土器、 古式土師器、 須恵器、陶器、 磁器、土師質土器	

要約	弥生時代後半からの遺物や溝跡を検出したが、集落の中心には至らなかった。しかし、今まで平安時代後期から中世にかけて、希薄であった集落遺跡を確認できた。中でも掘立柱建物4基の検出は、この時代を反映するように検出でき、丸亀市内において中世の集落形態を考えるうえで貴重な発見となり、周辺に遺跡が広がる可能性が見いだせる成果を得ることができた。

2014 年 3 月 31 日　印刷
2014 年 3 月 31 日　発行

丸亀市埋蔵文化財調査報告　第 17 冊
丸亀市立飯野保育所園舎新築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
飯野西分広定遺跡

発　行　者　丸亀市一番丁（丸亀市立資料館内）
丸亀市教育委員会
印　刷　社　高松市田村町 363-3
四国工業写真株式会社